

特71

572

滑稽演說
席上



301206-000-4

特71-572

席上滑稽演說

原田 天蓋 / 著

M42.9

DAC-0017



特71

572

演席上
說





持刀
572



304

77W13890

自序

公會私會の席上、或は一夕茶話會の卓上、會衆の誰彼が懸談に時を移し、胸襟を披瀝して意見の交換を行ふに當り、終始沈黙傾聽するが紳士の能にもあらざれば、又文明人士の職にもあらず、然れ共斯る席上に於て、徒らに演說會と混同せしめて、喋々侃々の長談義を述ぶるは作法にあらず、却て一夕會若くは卓上演說の主旨を没却せしめん、會衆に不快の念を起さしむるものなり、要は簡明剔抉、自己が述べんとする意見抱負の話題を捉へ、要を摘みて一言會衆の腦を抉り、腦を刺す的の寸鐵を學ばざるべからず、又時には鹿瓜らしき態度を避け、徒らに會衆の肩を凝らさしめざる的の針刺を要す、とはいへ高座の落語家を氣取るべきにもあらず、話題は何處までも正々堂々を要す、要は用語を梳曲に修辭に諧謔を交へ、以て會衆が頤を解く裡に寸鐵意義を徹底せしむるにあり、本書は此の二大目的に依て、予が方今社會に於ける百般の事例を參酌して叙述配列したるもの、亦一例と爲すに足ることを自信し、以て巻頭に自序す

孤暉の夏に傳易しつゝ、

天聲生誌

席上演説目次

- 講義と社會百方面
教訓……………一
- 使用人と餓鬼大將……………一
- 大に不平なれ……………四
- 猛進は成功の母……………七
- 自己を信認せよ……………二
- 當今青年の學問振り……………三
- 學校は桂庵か……………七
- 大に修養せよ……………三
- 平凡思想の必要……………二四
- 平凡思想と常識の發達……………二七
- 古人の精力主義……………三〇
- 現代青年の心得違ひ……………三三
- 精神墮落の防禦法……………三五
- 心配しても心痛するな……………三六
- 精神修養法……………三九
- 文勇の本源と獨立自尊……………四三
- 職業は性質の向く方面……………四六
- 商賣道は六ヶ敷い……………四九

○驛夫は法學士……………五

○車挽くとも恩人作るな……………五

○人生奮闘の最終目的……………五

○結婚には用意が要る……………五

○最も下劣なる人間……………五

○英雄豪傑は摸倣するが嫌ひ……………五

○處世の才……………五

○酒に酔ふても空氣に酔ふな……………五

○妻を迎へるなら中年の女……………五

○夫婦年齢の大差は大きな不幸……………五

○今日青年一般の惡弊……………五

○奥様は働かぬもの……………五

○下女の爲めに下女が附く……………五

○仕事の裏表は感心せぬ……………五

○上役に媚び諂らふな……………五

○狀袋一枚でも横領罪……………五

○謹嚴と處世社會百方面……………五

○勞働と神聖なり……………五

○貧富と學科の選擇……………五

○世評を意に介するな……………五

○摸範的大偉大目蓮……………二

○厭世思想と宗教……………二

○道義觀念に乏しき商人……………二

○危険なる拜金宗……………二

○高等海員としての資格……………二

○文學研究者と外國語……………二

○勤儉貯蓄の必要……………二

○活氣と歐米の文明……………二

○活氣と豐太閤……………二

○活氣と成功……………二

○學校と處世術……………三

○學校と社會の衝突……………三

○役人何ぞ……………三

○缺點の矯正……………三

○勤續の辛抱の差別……………三

○使用人の仕事に干涉するな……………三

○使用人を譴責するな……………三

○武士道の一節……………三

○自己を知るは處世の要訣……………三

○證文よりは證言……………三

○自己の分限以下に居れ……………一三九

○安心と極端社會主義……………一四一

○良心の満足……………一四三

○店員使用の心得……………一四四

○耕作改良に就て……………一四七

○大資本と小資本……………一四七

○牧畜を奨励す……………一四九

○法律上より見たる主従關係……………一五〇

○手形と商取引……………一五二

○政黨とその價値……………一五三

○人格と公園……………一五六

○古來に於ける武士道……………一五六

○活動を孝行……………一五八

○立身は男らしくせよ……………一六〇

○先輩は後輩に接觸すべし……………一六四

○社會の教育……………一六五

○先づ境遇を開拓せよ……………一七〇

○平和時代の戰士……………一七二

○不規律的惡習を打破せよ……………一七四

○神經過敏の社會……………一七八

○青年に根氣なし……………一六〇

○道徳の根底破壊す……………一六二

○青年と宗教的信仰……………一六五

○精神修養と論語……………一六七

○美妻は痲痺劑なり……………一六九

○立泳と社會游泳……………一七二

○宜しく積極的たれ……………一七五

○番頭小僧はどんなのが役に立つか……………一七九

○結婚と活動……………一八〇

○實力が一番……………一八二

○日本人と商業道徳……………二〇一

○大に廣告せよ……………二〇五

○金持と貧乏人……………二〇六

○不得要領も處世の秘訣……………二〇九

○株屋と膽つ玉……………二一一

○新聞記者は商人か……………二一五

青年と
活氣
席上滑稽演説

原田天蓋著

○ 諸君 社會百方面

○ 使用人と餓鬼大將

使用人と餓鬼大將とは随分思ひ切つた題目であります。方今社會を見ますと、慥かに眞理があるやに見受けまします。先試みに思ふても見られよ、ロツクフェラー氏といへば世界有數の人でありますが、此の人は自分の事業を大切と思ふだけそれだけ大いに人物の養成には力を注いだ人でありまします。抑々氏がオックスホード

大學の給費生選抜要項なるものを見ますと、その中にこんな條項が書き加へられて居ります。曰く「予の給費を仰ぐ學生は單に學科が優等で體格が強壯で而うして品行の正しいだけで可けない、尙ほ更らに餓鬼大將となり得る丈の資格がなくはならん」とあります。さすがは多年人物を使つて尨大なる事業を遂行した人の實驗でありまして、私は痛くこの條件に對しては同感もし且つは賛成するに躊躇しないところであります。一体當今の社會要求は、愛嬌があつて、お世辭が上手で、それで主人の命令に善く服従する許りでなく、手豆に如才なく働く青年が欲しいといふ注文が多いやうであります。この注文は如何様尤もの節があるのみではなく却つて今日の青年はこの注文に當て候まり過ぎて居る傾さがないかと思ひます。夫れやこんな青年所謂使用人は一寸使ふには成程調法でありませう、が若

し事に當らしめ難局を處せしむる場合などには果してそれだけの役に立ちませうか極めて温順で何事にもヘイ／＼言つて働く人間も、それや必要ではありませうけれども、青年の悉くか皆こんな人物ばかりでは實に心細いではありませんか、全体有り様に申しますと、極めて氣力に富んで、骨柱があつて、血は躍々として、どし／＼不平も云はらし、罷り間違へば課長だらうが、社長であらうが抛ぐり付けも爲し兼ねぬと云ふ位で、實にあんな男が來では使ふのに困る。誠に險呑至極であつて誰れが使はれて居るか分らぬと云つて持て餘す程の青年があつて欲しいのです。だといふて便所の壁に悪口を書くとか、ナイフを持ち出して鬪撃ちをするといつたやうな陰險な片々たるものでは仕方ありません。眞の餓鬼大將であつて正々堂々の陣を張る底の使用人こそ立派に仕込んだなら本統の役に立つ人間どもなりませう

から、斯の如き突飛の意見を吐いたやうな次第でムります。

使用人 餓鬼大將 所謂 梳白大將

真理 正理。 養成 選抜 尨大 躊躇

お世辭 追従 輕白。 手豆 足豆。 如才 機

敏。 調法 結構。 難局 難處。 温順 柔順 素直

骨柱 陰險 表裏。 突飛

○大に不平なれ

前辯士は餓鬼大將的の青年を推奨せられましたが、私とて双手を舉げて斯かる底の青年 人物を要求致します、一体自分の意見の爲めには地位を擲つ位の事は何と

も思はぬと云ふ程の熱心家が欲しいので、斯る熱心家が乏しいのは甚だ心細い次第ではありませぬか、今日の青年はあまりに利巧であつて、若し此處を止されたら直ぐ食ふに困るから、まあ、黙つて辛抱して置かう、何も自分の事業ではなし、己れの仕事に影響もすまいし、何も利得にはならんから、兎に角自分一身の安全を計ることを眼目にして、何事も長上の覺悟芽出度き様にするに若かずいていなことを考へて如才なく立ち働くのが多い、すべて「己れ」と云ふ見識のない人間は、殆んど能力のない機械も同然である、苟しくも此の見識ある人間ならば事に當り、物に處して何等かの意見がなくてはならんものであります、意見のある以上は時に不平もあるべき筈、社會は此の不平に依つて初め、進歩することが出来るのであります、この眞理 不平こそ會社商店乃至は一個人でも皆同じことでありまし

て、不平は進歩の母とも云ふべきものではありませぬか、ところが何うです。今日の社會各方面を見渡しますと、可成不平のない人間を使ひたいといつて居るのが頗ど分らぬ、果してその了見なるものが那邊にあるやを解釋するに苦しむのであります。不平のない人間が何の役に立つか、又假令不平を持するとして、それを堂々と發表せずして徒らに蔭で愚痴を溢して居る如き人間が何の役に立ちますか、不平のない人間はつまりその業務には不熱心、不忠實しかも進歩的能力のない證據と見なくてはなりません。それも單に給料上げのストライキ位では仕方がないが、正當の意見を抱いてならば、堂々たるストライキを起す位の氣性あるこそ、寧ろ歡迎するところであります。終りに臨んで大に不平なれ、而かも正々堂々の陣を張つて大々的不平なれと申す所以はこれでお分りになりましたでせう、こゝらで御免を

蒙むる。

推奨

影響

見識

思想

那邊

能力

|| 分別

|| ストライキ || 同盟罷業

|| 氣性 || 氣

(萃 拔)

力性格

○ 猛進は成功の母

「如何にせば成功するであらう乎、この陳套であつて陳套ならざる問題は、たゞに現代青年が煩悶の材料のみではなく、人生に於ける一問題たらふと思ひます。しかも幾度か考究され幾度か繰り返されたこの問題は、考究され繰り返さるゝに隨つて、愈奥の底が分らず實際を期し難い感があるので山いします、だが私から考

へますると、世人は餘りにこの問題を考へ過ぎはしまいか。あまりに研究し過ぎた結果が愈々六ヶ敷くなるので御座いまして、實は左程深遠な意義のものではなからうと思ひます。然らば何うかといひますと、唯一言で盡さるのであります。即ち單刀直入である、唯だ實行せよ、實行せねば成功も不成功もない、總て物事は考へ過ぎては却つて失敗する。敢爲猛進、實行するものこそ萬事に成功すると申したいのであります、それは正直——勤勉は成程成功の要素には違ひないのであります、その正直勤勉に加ふるに敢爲猛進の勇氣が缺けては駄目であらうと存じます、すべて世の中のことと云ふものは無鐵砲にドシ／＼ヤツツけるが宜しいといふのであります、ところが世間ではさうは申しません、何事をやるにも熟慮考究をなして然る後最も慎重に最も謹嚴なる態度をもつてやらねばならぬと申しますが、こ

れは大變に間違つた事だらうと思ひます、物事は考へることも必要には相違ありません、又物事を餘り考へ過ぎますと、前申した如く却て迷ひの雲に鎖されて分らぬやうになつて了い、なる仕事も出来ぬことになるかと存じます、近いお話が我國と露西亞とが戦争をしやうといふ初めに當つて、必らずしも我國に勝算があつてやつたど什麼かは疑問ではありますまいか、何んでも角でもヤツツける、いけてもいけぬでも、最後までヤツツけると云ふ大勇氣があつたのみだらうと思はれます、即ち有形の計數上から論究して、日本が屹度露西亞に勝つと云ふ見込があつた譯ではなからうと考へるのであります、そこでその結果は何麼で御座います、世界の強國を以て誇つて居たあの露西亞をメチャ／＼に敗つて仕舞つたと申しますのは、畢竟する我國には有形上、計數上の勝算はなかつたにもせよ、無形の勝算、

即ち精神上に鞏固不拔なる大決心と大勇氣。乃至は大覺悟があつたからでは無いませぬか、假令味方は全滅しても滿州の野は一步も去らぬといふ自覺。即ち凛とした秋霜烈日的の日本魂——一名猛進の氣性が然らしめたのであります、私が凡べてに猛進が成功の母と申すのは茲處でムります。

猛進——猪武者——向不見。成功——陳套——陳

腐——遠。煩悶——材料——研究——深遠——深

輿——遼遠。敢爲——勇敢。要素——原素。熟慮

の計數上——謹慎——慎重——態度——疑問——有形

霜烈日的——論究——鞏固不拔——秋

の計數上

論究

鞏固不拔

秋

○自己を信認せよ

「猛進は成功の母を言はれた前辯士の説を賛して私は斯る演題の下に一言致しまする、一体世の中にはまア能く考へて見るとか、又考へてから豫算を出すとか云ふ者がありまするが、その考へといふはどんなものかといひますると、世間の人のやつたことを標準として考へるのであります、それでその世間の人々が悉く利巧かど申しますると、さうではありませぬ、大方は馬鹿であります、その馬鹿な人のしたことを標準として考へたからといつて仕事の出来る筈がないではありませんか。抑々自分の聰明を棚に上げて他人の馬鹿な經驗を標準として考へたり調べたりする程馬鹿な話はありません、全体大概の人が多くは自己を棚に上げたがるものがある

には驚くの外ありません、これ程卑怯で男らしくないことはありません。だから何んでも角でも自分程エライ者はないと云ふ考を持つてドシ／＼進む、ヤツツける……と申しますると前辯士の口吻を真似るやうで感心致しませんが、實際がさうだから仕方がないだらうと存じます、兎に角さうと自己を信認して常に邁進する、そのうちには失敗をすることもあらう、併し失敗をすればしただけの経験が出来るから、何んでも自己に信認して實行するに如かずといふ譯をアラ／＼ザット一言致し置きます。

(萃拔)

信認 邁進

標準 || メ | ト | ル || 羅針盤。 聰明。

○ 當今青年の學問振り

私は一つ當今青年諸子の學問振りを判断して見ませう。天下の青年が輦轂の下に集まつて諸種の志す學校に這入るのは何の爲めでありませうか、學問するのは人裕を高めるためだとか、イヤ人間の勤めであるとか、かんどか口では成程高尚なことを申しますけれども、その實を申しますると何れも相當な地位に有附かんため、但しは金儲けがしたいに相違ありません、だから法學に志す青年は毎夜高等文官、但しは判檢事辯護士を夢みて居るでせう、商業學校に居る學生は富豪か若しくは一躍して大會社の支配人になるのを空想し、機械工學生は南滿鐵道の技師位にならねばといつたやうに各々その方面のみを驢がれて居るに違ひはないのでせう

で假令哲學又は宗教といつたやうな活社會には頗る縁遠い學問を修むる徒でも、卒業の曉は深山幽谷に隱遁して只管道を究めやうと思ふものはなく、矢張り博士になりたいたか、大學教授に成らうとかの野心はあるのであります、全体斯る空想|| 空中の唇氣樓的な希望は、社會の秩序が整ひ、法律や規則を以て組み上げられた現今、一足飛びの高官とか、一攫萬金を占めやうてなことは到底出来るものではない是非ともこれに要する智識と實力乃至は相當な經驗を積み上げて然る後、徐々に希望を達すべきであるのは論を俟たないだらうと考へます。

成程一時成金黨が痛く跋扈挑梁を逞ふし、相場で巨萬の富を作つた輩も出たことはありまするが、斯るところのことは寧ろ例外でありまして、凡べての青年が望み得べきことではなからうかと存じまする、とはいへ實業界にせよ何處にせよ、ま

アチヨット申しますると現今の流行物、一般が羨みの的にして居ります三井とか乃至三菱、或ひは郵船會社にしまして、これ等へ這入らうとするには是非學問が必要であります、學問も學問殊に新智識がなかつたなれば、天性商界の驅引に巧みなりと雖も學識もなくエービーシーも知らずして何處とて觀迎しては呉れません。

さればこそ學生の数は毎年毎年増加して参りまして、大學とか高等學校とか常に満員大入の札を掲げて居る繁昌は無理からんことで御座います、何れも虚榮の夢名譽の想いをせられるのも無理はないので御座います、そこでこれ等を一々分析して見ますると、法科大学に這入るは官吏とならん爲め、醫科大学に這入るは醫師とならんため、これは無理もないこと、高商に這入るのは卒業した曉は直ちに會社銀行の羽振りよきところに就職せられるがため、慶應義塾に這入るのは中上川さ

んが死んだとはいへ未だ朝吹とか波多野乃至は井上角の袂に絶つて三井なり炭礦なりへでも行かれる便宜があり、早大に這入るのは大隈伯の推薦状を得て進歩派の新聞記者にでも入ることが出来るからであるつていな、何れも夫れ相當な便宜野心に驅られて居るといふことが明白ではありませんか。そこで私は當初の題意に立ち戻つて觀察判斷致しますると、大々的目的とするのは一に地位を得、二に金錢を得るにあることは一目瞭然ではありませんか、換言致しますると今日の青年諸子は道樂や趣味乃至は人格とか何んとか高尚の理性を養ふために學問讀書するのではなくて、一に名利を得んがために學問せらるゝことが判斷致されませう。オットこれは案外長談議となりまして時間が切れまして御退屈さま。

櫻)

轡轂——皇居。

空想——妄想。

深山幽谷

命主は身動くたははかすかに

一櫻

かみつ

跋扈挑梁

虚榮——紫雲たなびく極

(萃

樂淨土。

瞭然

名利——名譽利得。

○學校は桂庵か

前辯士は頗る趣味ある判斷をせられました。そこで私もチョット感じましたから斯様な題を掲げまして一言致しませう、大抵當今の青年が學問するといふ結果、即ちその望んで居つた名利なるものが果して豫期通り付らるゝかといふのは大きな疑問だと存じます。彼の大學を卒業するまでには少なくとも數千の金が消ねます。が、それなら卒業後すぐに官吏となり或ひは支配人乃至は技師とされるかと申しますとソウうまくは問屋で卸ろして呉れませぬ、先づ方今定まつて居る大學卒業生

の月給相場は大抵二十五圓と極まつて居りまするがこれさへ覺束なしもので、供給は常に需要を超えて居りまして學士連と稱するもので下宿屋に轉がつて居るものは澤山ありまする、彼等は居常リストの保護經濟政策を喋々もし、ホルンハツク、セイデルの國法學も受賣りまする而して口角泡を飛ばしてトラスト論も闘はしまするが、さて飯を食ふことが出来ませぬ、如何科卒業証書を見せびらかしても誰れから迎ひには來ませぬ、さアかうなると當初豫期して居た學問は直ちに名利を得らるべしといふ想像が一度は挫折するの不幸に遭遇するのでムいます、ヨシこんな手合は別としてヤットこさで職業に就く、それで或者は日本銀行に這入つたとはいへ月給は二十五圓で賞與金を加へたにしたところが月四十圓位、まわく儉約さへすれば二三人の家族は養へぬことないが、學生時代に空想を描いて居た黒鴨仕立の自用

車とか、玄關前に馬車廻しの附いて居る邸宅などは前途マツト遼遠な話であります、又官界に志したにしたところが、文官高等試験にはヤット登第しても各官廳はさうく手を空けて待つて居らぬから何れもこれ満員、奉職は仲々困難であるが兎も角種々の蔓をたくり繩に傳はつて漸く勤め口を探し當てたところで、一二年永きは三四年間は判任官の五級から六級位で甘じて居ねばならぬ、それで其の後僅かに高等官の七等位に叙せられたところで三等から四等に昇進するまではそれこそ容易の業ではありません、況んや勅任官とか親任官の如きに到つてをやで明の曉星も當ならざる困難さ、到底お話にはなりません。さアかうなると大學を出れば直ちに大臣位にはなれるといふ彼等の空想は根こそぎ破壊せられて仕舞つて、これは何らも方角が違ふ哩かうした筈ではなかつたがどの歎聲を發せしむる場合となつて

茲處に再度の挫折を來しさては意氣沮喪となり或ひは自暴自棄となつて、大臣を描いて上京した輩も漸く片田舎の郡長位に安んじ、第二の澁澤たらんとして高商に這入つた連中も資本金僅かに十萬圓位の銀行支配人に落着くのが關の山といつたやうなそれはく情けない境遇となつて、意氣は揚らず喪家の狗といつた形に成り下り到底將來の大業など思ひも寄らぬ次第に立ち至るといふ、一大病患が現代青年の思想に縋り、學校を宛然桂庵視したからの間違ひではなからうかと推察致しまする

(萃 拔)

- 桂庵——口入屋。 豫期——希望。 供給へる。 需要ひる。
- 想像 遭遇 破壊 歎聲 挫折
- 自暴自棄 關の山 境遇 喪家の狗
- 病患 宛然

○大に修養せよ

前々辯士から前辯士の御説は最も面白く拜聴致しましたが。何れも指摘せられたのみで果して如何にせば宜しきかといふことは仰つしやらかなつたやに思ひますから一つ不肖が教ぬることに致しませう、エヘン、學校さへ卒業すればエライ者になれる、學問さへ修むれば樂に飯は食へるといふ考へが現代青年の病患であり、學校を桂庵と思つてゐるのが間違ひであるとしませすれば、果して學問——即ち學校に這入る目的は那邊にあるかといふ解釋が第一の先決問題のやうに存せられます、即ち學問なるものは各自の天分を知つて又これを發揮するためには修むるもので、決して財産や地位を作る資本ではなく、謂はゞそれ等の基礎を築くに過ぎない、否な單に設

計を立てたに過ぎないと申しましても宜しからうかと存するのであります、この解釋を誤まつて居るからこそ種々の失敗、失望が起るので、學生が勉強する教科書は時事新報などの職業案内の如きものではなく、又學校さへ卒業すれば府縣知事や乃至は日本銀行の理事になれると相場が極まつて居るものではないが、と極まつた日にはそれこそ大變であつて、如何なる愚物も心配することはないが、世の中はツラ甘くは行かぬ、否な行かぬのが尤もであります、全体この學問といふ解釋は前由上げた通りであります、これは人間が生れながらにして自己の天職が何れにあるかといふことは分らぬもので、これを辨へさせるのが即ち學問であるので、教育さへすれば英雄となり、大學者となる、所謂自己の天分を自覺して斯ることは必らず爲し能ふといふ自信力を生せしむるのであります。だからこそ單

に一片の設計方針を指示したに過ぎない、即ち「汝は實業家となるべし」とか、「汝は宗教家になるべし」とかいつたやうに一々指示するのであつて、その指示に従つて始めて社會へ乗り出し漸次基礎工事に着手するものであります、然らばその後の方法如何といふにこれは單に修養を怠るな、大に修養を積むべしといふに過ぎないことで何も六ヶ敷き屁理屈は要らぬのであります、といふのは成功の域に達せしむるには學問や書籍の力では駄目であつて、イクラ研學したところで、いくら卒業證書一枚で立身せんとしたところでこれは到底不可能といはねばならぬ、そこで始めて學問した以上は世の風潮に當つて幾多の經驗を積み、幾度の困難苦痛も經る修養——即ち勤勉、忍耐、克己、不屈、節制等の要素に依つてこそ當初の目的たる地位とか金銭とかを獲得すべきものであると考へます、到底世の中は安んずるとは參ら

ぬもので、牡丹餅は時偶ま棚から落つることあつたとして、功名富貴は書齋の中に生まれもせず、又泥の中に潜んでも居ないものでありますから、修養を重んじて社會の荒浪に飛び込み力戦奮闘するにこそ最大捷徑であると存じます。

(萃抜)

- 指摘 さしめ 基礎 きそ 愚物 ぐぶつ 指示 しじ 修養 しゆよう
- 風潮 かぜう 勤勉 きんべん 忍耐 にんげん 克己 こくぎ 不屈 ふくつせ
- 節制 せつせい 獲得 かくとく 力戦 りきせん 血戦 けつせん 奮闘 ふんとう 奮戦 ふんせん

○平凡思想の必要

平凡思想の必要とは思ひ切つたやうな説ではありまするか、決して左様では有りませぬ、凡そ既往の歴史を繰り繕げますと洋の東西を問はず、英雄豪傑が代々世の

中に出掛けまして嶄然頭角を露はし獨り功名手柄を輝かして居ましたので、いいますだからその時代には幾百萬の同衆が居たにも拘らずその英雄と稱し豪傑と稱する者の獨舞台でありましてその他の同衆なるものは殆んど零と云つても宜しく所謂水平線上に認められては居なかつたもので、いいます、ところが世の推移進歩に随つて、この英雄豪傑が段々と減少し、世の中が進めば進む程その舞臺が狭かく且つ寂びれて来たやうに思はれます、如何様近世となりましても政治界とか、軍界とか、實業界とかに多少傑出して居る人が居るには相違のりませんが、昔の英雄のやうに天下獨歩の大活躍をすることが出来ないのであります、それやまた何故かといひますると人智が開け、世が進んで行くに伴ひまして個人々々の位直が高くなりましたから、彼の英雄とか豪傑とかのやうに獨り高く止まらしめなくなつたので、謂

はゞその必要が減じたのであります、大体半開の時代と申しますものは一体の
 人智が極く低くかつた爲めに、少しでも秀ひでたものがありますと忽ちに英雄と
 豪傑ともなることが出来たので、今更には、現今の如く多数人民の智徳が一齋
 に進んで來まするといふと、なか／＼さうは出来ないのであつて、またさても致
 しません、だから英雄豪傑の減少するといふことは一面から見ますると誠に慨歎の
 至りではあります、これは寧ろ一國進歩の反映として大々的祝賀すべきであら
 うと存じます、論より證據若し日露戦争が古代に在つたとしますれば英雄豪傑が雲
 の如く霞の如く顯はれ出でたで、いませうが、現時の國民はそこまで英雄崇拜の
 熱にかぶれなかつたから、別段に英雄豪傑も見なかつたと申しますのは畢竟國民
 個々が大に進歩して寧ろ英雄獨力に任するより、國民個々の集合力によつて、この大

偉業が成し遂げられたものと見な差支へはないので、私 が申す平凡思想
 とは即ちこのことを申したので、平々凡々の力といふものは一國が平等に發達する
 最大要素だと存じますから、尙益々平凡思想の發達必要を鼓吹致したので御座い
 ます。

(萃 拔)

- 平凡 || 平々凡々。
- 既往 || 嶄然。
- 頭角 || 同衆。
- 推移 || 傑出。
- 獨歩 || 活躍。
- 活動 || 反映 || 反射。
- 崇拜 || 大偉業 || 大勳業。
- 鼓吹 || 獎勵。

○平凡思想と常識の發達

常識の發達と申しますのは、要するに平凡思想といふことの中に含まれて居るものであります。然らばこの常識即ちコンモンセンスなるものは如何なることかと申しますと、全体に於てはいろくど入釜しい議論があるせでうが、つまり事物を有體に直覺してこれに同情しその始末を平凡の徑路即ち途筋に由つて付ける意識であらうと存じます。それで之の常識が普通處世上に極めて必要であることは今更ら喋々の必要も御座いませませんが、兎に角國民の總べてがこの常識を胃滿に發達せしむるやう、大いに努力することが最も肝要であらうと思ひます。全体英雄とか又は天才の人とかいふものには、その言動に突飛なことが多くて、なかく調子の外れたことをやり社會の耳目を驚動せしめるやうなことがありまする、もとよりこれは一つの特色には相違ありませんが、しかもこれを以て一般の範とは出來ないばかりではありません、今日のやうな秩序、正しい組織的の時代にわつては尙更ら破格めいたことが萬事に亘つての法則では無いませぬ、ここは何うしてもコンモンセンスによつて、平凡の徑路を規則正しく進んで社會全体の進運に資するやうにせなければならぬのであります。彼の土臺の基礎もない驚天動地の事功が一時快感を博するかは知りませぬが、ツマリは線香花火に過ぎないことで一國永遠の進運上から着眼しますると格別有難いもので無いませぬ。にも拘らず世の中にはこの平凡といふことを甚だしく忌み嫌つて、その行路を辿るのが何んだか自己の不見識を博するやうな考へるのが何うかは知りませぬが、他に對する同情もなく思ひ遣りもなくして自分の勝手氣儘に任かせ行く紳士と稱する一連が多いのには甚だ恐縮する次第であります。

りではありません、今日のやうな秩序、正しい組織的の時代にわつては尙更ら破格めいたことが萬事に亘つての法則では無いませぬ、ここは何うしてもコンモンセンスによつて、平凡の徑路を規則正しく進んで社會全体の進運に資するやうにせなければならぬのであります。彼の土臺の基礎もない驚天動地の事功が一時快感を博するかは知りませぬが、ツマリは線香花火に過ぎないことで一國永遠の進運上から着眼しますると格別有難いもので無いませぬ。にも拘らず世の中にはこの平凡といふことを甚だしく忌み嫌つて、その行路を辿るのが何んだか自己の不見識を博するやうな考へるのが何うかは知りませぬが、他に對する同情もなく思ひ遣りもなくして自分の勝手氣儘に任かせ行く紳士と稱する一連が多いのには甚だ恐縮する次第であります。

(萃 拔)

事物こと 直覺ちくかく 處世ちよせ 圓滿えんまん 努力こつりく

言動ごんどう 言語動作ごんごうどうさく 突飛とつひ 耳目じもく 天才てんたい 天

性の才子せいのかうし 範はん 破格はかく 驚天動地きやうてんどうち 天地てんち の

驚動きやうどう 快感くわんかん 着眼しやくがん 恐縮おそしゆく

○ 古人の精力主義

精力主義せいりきしゆぎと申まをしますると甚しばしばた危あやツとしたやうでまいりますが、御存知ごぞんちの方は先刻せんこく御承ごせう知ちのこと、存ぞんじまする、全体精力旺盛ぜんたいせいりきようけいせいなることが如何いかに事業じしやうに對たいして必要ひつようであるかは喋々てつてつを要よしないところところでまいませう、これに就つて私わたくしは茲こゝに古人こじんが如何いかに精力絶せいりきだつ大だいでありしかを一言辯ひんべんじませう、聖武帝せいぶてい、光明皇后くわうめいこうごうなどの御事跡ごじせきは申まをす迄までもなく、

爾餘にのあひ幾多輩いくたはいしゆつ出いせる名僧めいそうの如ごときか何いれも今日こんにちに至いたつては我々われわれをして轉うたた感歎かんたん措おく能あたはざらしむる多おほくの事蹟じせきを殘のこされて居をるではまいませんか、彼の弘法大師こうぼうだいしの如ごとき身みは多忙たぼうでもつてしかも文字もじも上手せうずであれば繪えも上手せうずであるのみではなく、或あるひは地理ちりを研究けんきうして各地かくちの名山めいざんに寺てらを建たてられたなど、今日こんにちに至いたつて見みますると千年後せんねんごに於おてすら誰たれの眼まなこに見みても是これより以上いじやうのよい處ところは發見はつけんし難がたい位くらゐの立派りっぱな處ところでありまする、それはかりではなく彫刻てうこくに至いたる迄まで極めて上手せうずであつたのでまいませう、又光またこう明皇后めいこうごうなども澤山たくさん經文けいぶんを悉ことごとく御書ごんがきになつて居をる外ほかいろくくなことをなされて居をる、これ等ら一々いちいち舉あげたら限かぎりもありませんが、これこれで以もつて見みますると如何いかに昔むかしの人が精力過絶せいりきかぜつであつたかを証しやうするに足たるのでまいませう、勿論もちろん今日こんにちと違ちがつて閑ひまが多おほかつたらうなど、申まをされるかは知りませんが、その當時たうじたとして支那しなの文明ぶんめいが引ひッ切き

りなしに滔々と輸入せられて居つた時代でなく、忙しかつたものであります、
 それに今日は何うで御座います、文明の有難さには科學の力を借りる事も出来れば
 交通の開けるなど總てが便利に重寶に出来て居るではありませんか、當時(古代)の
 如きは斯ることは夢にも思へず非常に困難であつたにも拘らず佛教を盛んにして人
 の精神を教化するなど古人の精力が如何に偉大であつたかを想ひやる事が出来て
 眞に追慕の念に堪へぬではありませんか、これを思へば我々として祖先に就て學ぶべ
 き事は多々益々あるやうに考へます。

- (萃 拔)
- 精力——精神的力圖
- 過絶——絶大
- 教化
- 旺盛
- 爾餘
- 事跡
- 追慕

○現代青年の心得違ひ

近頃頻りに日本人はぬらい國民になつたと申しますが、これは今人が獨りでは
 らくなつたのではない、すべでこれ祖先の賜物だらうと考へます、こんな
 善い祖先をもつたからこゝを始めて我々の今日を致したのでありますから、これを
 研究するといふことは極めて必要ではありませんか、若しさうしたならば如何に
 祖先がぬらかつたかといふことが成程ハ、ンと思ひ當る節が澤山あるに相違なから
 うと存じます、それを何うですか、現代の青年などいふものは自分獨りでに
 らくなつたかなどのやうに思ひ、一にも西洋、二にも歐米と毛唐臭ひこと許り騒
 いで居つて、チットモゴ自分祖先の事に思ひ及ばぬのが抑々の大間違ひであると申
 すので御座います、如何様斯様に申しますと彼奴は保守的主義の頑固人間だ、
 天保の丁髷人間だと仰つしやる方もありませんが、まア物は試めし能く考へて御覽

んなさい、古人は多忙の身を以てしかも困難の時代に遭遇して到底今人が及びも付かぬ大事業を爲し遂げて居るでは無いと云いませんか、西洋の文明だとして強ち悪いとは申しませんが極東世界に於ける日本の今日ある所以といふものは實に祖先の力が多いではありませんか、この美しい尊いところの歴史を國民が充分に自覺せぬといふと得てして飛んでもない誤解に陥り易いといふことを心配するからで云います、それを何うです多くの人はこんな美しい固有的國民精神が先祖から傳はつて居るのも知らずして何んでも角でも外國の事許り云つて、陳忿漢忿諱の分らぬことをいふが、その珍重がる外國人ですら今日は日本の歴史とか美術とかを學びたい、研究したいと申して續々來るではありませんか、なれば日本人たるものは外國の事より先づ先きに自分の國の事を學んで置く必要がありませうと存するので云います、これは單

に一二の事柄のみではない總てのことを學ぶ必要があるのです、則ち人間の裝飾には内と外とがありますやうに、日本の歴史にあることが日本國民の内部即ち胎内の飾りとしませすれば、西洋の文物は取りも直さず外形の裝飾に過ぎないといふことを考へて貰ひたいので云います、左様なら御免を。

(萃拔)

保守——固陋。

固有的

胎内

○精神墮落の防禦法

人間は何事をしますものにも精力を養ふことが第一番の必要で云います、それでこの精力と申しますのは精神修養から來るもので御座いまして、彼の紳士連と申し

まするものが遣るやうな、無闇に味い物を喰べたからとて決して精力は増進するものではありませぬ、すなはち扇を使ひますると風が来て涼しいと思ひまする如く、精神を涼しくさわやかにするには習字をするとか、静かに會心の書を讀むとか、又は美術を玩味するとかしますれば自ら精神が爽かになり全く別天地とかに棲まはせることが出来て、人間といふ苦界から脱却しまするのみではなく精神休養ともなり、一面には趣味の涵養となつて自ら人格を高尙にする利益があるものであります、如何に事業が忙しい人でも自ら求めさへしますればその塵喧の境を離れることが出来て精神の疲勞を忘るゝことが出来るといふものであります、それでこの精神休養即ち心機を一轉させるといふには習字などの方法も儘かに効能があるのであります、兎に角小人閑居すれば不善をなすといふことがありませぬが、常に精神の俗

化さへ防ぎましたなれば決して左様の事をするものでは御座いませぬ、殊に實業家など、申す者は平生俗事にたづさはつて居りますから稍ともすると俗情に陥り易く知らずく精神の墮落を來すものでありますから、丁度病人が薬を飲みますやうに常に一方から高尙な趣味の注人に勉め、その涵養を心掛けななら、冀くば精神の俗化を防ぐどこか出来ませうと存じまする。

(萃 拔)

- 會心あつた 玩味あそぶ 脱却たつ 塵喧の境ちんけん 黃塵わうじん
- 喧擾の社會けんじょう 疲勞つかう 心機しんき 閑居かんこ 俗ぞく
- 情せう 注入しゆにん

○心配しても心痛するな

大分精神とか精力とかに就て御説がたまはしたが、私にはこゝに標題の通りを掲げて一言補いたいと存じます、乃ち精神修養の最大奥秘は心配して、濫りに心痛をするなど云ふことが一番であるかと考へます、方今の青年は日新の學問をして成程智識は申分なく研いて世の中に出て來ますが、この肝腎な精神修養に就ては今一息缺けて居りはせぬかと存じます、それは随分教育がある青年であつて、僅か些細の事から失望し煩悶し、華嚴病に罹るなら未だしも、或ひはその結果が本心を失つて悪事を行ひ、あらゆる社會から指彈せらるゝに至るのが多いのは誠に歡かしい次第で、これ等はその確信のなす加減から平生の精神修養に一大缺點があると云ふことを証明して居るではありませんか、私が現に或る有數な人から聞きました實驗談に依りますと、その人は性來の船嫌いであつて、動もすれば少し位なる波浪

にあつてもすぐ船暈を催すので、旅行するには可成海路を避けるやうにして陸路に依る方針であつても、一旦船に乗らねばならぬとなつた以上は最早彼是れと心配せぬ、必らずそこに常住の安心を求めらるから、どんなに風浪が烈しくても心は至極靜安であると話されたが、これは如何にも名言で、人生總ても常に斯のやうな心掛で渡つたならば失敗はせぬ、即ち心配するはよいが心痛はせぬといふ修養の結果を求めねばならぬかと存じます。

(萃 拔)

奥 秘

些 細

指 彈

確 信

○ 精神修養法

精神修養法と申しましてもツマリは精神の墮落を防禦する方法であつて、これは前の辯士に依つて述べられたやうでございましたが、私は茲に敢て重復するのも構はず今一應具體的に述べたいと考へますから暫時御清聴を煩はしたういたします。この精神とかイヤ修養だとかの小六ヶ敷い屁理屈は既にお述べになりましたから、茲にそんなことは一切抜きと致しまして直ちに本題に這入ること、致しませう。全体精神修養の方法はと申しますと、これは出來得る限り日々時を定めて、これ等に關する書物を規則的所謂強制的に讀むだが一番でよいです。とはいへ世事に關係するやうになりますと、さうく學生時代の如く規則的實行に至難でよいですから、随つて一定の時間が得難いものであります。さればといつて放任しては全然失敗に終りますから、これは何んでも絶えず心掛けて常住坐臥の際と申しまして一

向専念に忘れぬといふことが必要だらうと考へます、この方法でもつてやりますと絶えず心掛けるのを忘れぬため、忘れぬから一寸の暇でもあると知らずく繙いて見るといつたやうな調子で、このまた繙いて見るといふ觀念が抜けなかつたら、机上にも、机邊でも常にその書物が備つて居るからいつでも目に付く、目に付くから勢ひどんなに多忙でも全く忘れるといふことはない、忘れるといふことがないから旅行する時だつて必らず途中の伴を仰せ付かる、といつたやうにそれからそれへと連絡が付いて、遂にはこれが習性となつて自然心中に確たる信念が出來て來るものであります、それでこの信念といふものがまた平生は別段是れといつて著しく顯はれるものではないかもしれませんが、さて一旦大事にでも出會つた時には、その効果即ち修養の効能が歴然と現出するものであります。これで終りつ。

(萃 拔)

重複なかさ 具体的きゅうてき 〓 (反對に) 〓 抽象的たうさうてき 強制的きやうてき
 至難しじなん 常住坐臥じやうぢゆうざが 一向專念いけうせんねん
 連絡れんらく 歴然れきぜん

○文勇の本源と獨立自尊

一體勇と云ひますと、すぐに武勇を聯想するが當世で云いますが、勇にはその武勇と斯く云ふ文勇の二つがあるもので云ひます。それで武勇といふことはとにかくに御承知の通りのもので、素より必要のもので云ひまして、一旦緩急あれば義勇公に奉じといふ勅語もこれであらうかと存じます。一体今の世界は表面文明など、如何にも殊勝らしく構へて居るもの、その實は弱肉強食の世の中で云ひまして各國

は互に鉞を持つて立ち、間がな隙がなあつたなら、すぐさまこれに乗じて呑噬しやうとイヤもう恐ろし世界で御座いますから油断もヘチマもあつたものでは云ひません。それで武勇にも又二つが云ひます、彼の三十七八年のこと、大露西亞の壓迫に對し、怒るまいことか四千萬の同胞、一齋に渾身の勇を揮つて彼と戦ひましたのはこれ國民的武勇と申します、で一個人の武勇はと申しますと、怯めず臆せず身命を擲つて戦ふのをいふかと考へますが、このまた戦ふにもいろくあります、例へますると船乗が荒浪を蹶つて船を乗り出すのも、鑛山に入つて坑夫が危険な仕事をしますのも、未開の萬地に踏み入つて探險しますのも皆これ武勇から出て來たので誠に肝腎のことで云ひます、併しながら武勇許りあつたでは野蠻時代ならいざ知らず、一身一國の獨立を保つて充分に發展しやうといふ譯には参りませぬ、こ

所謂文勇と申しますのが大必要ではありませんかこの文勇といひますのは何時でも命さへ捨てればそれでよい、充分戦つて死ねばそれで役目は終りといふ譯には参りませぬ、此の點に就ては全く武勇と反對でありまして所謂匹夫の勇を揮はずして成る丈け卑怯にせねばならぬので、或る點に於ては可成死なぬやう。如何なる困難、又は如何なる迫害をも凌いで永く久しく生命を保ちまして自分の目的を達せんとしまするのが文勇の本旨でございまして、それと同時に吾輩は世の中の人を救ふものである、吾輩は國の文明を開くものであると云ふ自信を持ちまして、自分の主張を貫く爲めにはどんな敵が來ても怖れない、イヤ誹謗も來れ、オマケに迫害も來れ、サアモ一つ侮辱も來いといつたやうに、一生涯如何なる困難に遭うとも更に屈せず撓まず、と迄も主張を徹するのが是れ即ち文勇の主眼でございまして、だから

政治家としては攻撃、矢面に立つて政治上の主義を貫くとか、學者としましてはと迄も自分の學說を維持して發見したところの眞理を世の中に知らせるとか、實業家となりましてはどんな困難を凌いでも事業の發展をさするといふ何れも文勇が必要であらうかと考へます、ツマリ申しますとこれ等文武の勇が揃はぬ間は國の進歩を見るものでは有りませぬ、ひるがへつて見渡しますると我國の如きは昔から武勇國として勝れて居りますものゝ、さて文勇となりまするとコイツは一寸毛唐に、歩を譲りますから何んでも武勇は放つて置いて文勇といふことを養成しなればならんと存じます。それでこの文勇、本源は何かと申しますと、これ取りも直さず獨立自尊から來るものでございまして、餘り長いは却つて御退屈、等で御免を蒙りませう。

(萃 拔)

聯想（これらから、これへおぼやかること） 弱肉強食（よめいもの） 吞噬（とつて） 壓迫（おさ）
 迫害（おし） 壓制（おさ） 渾身（みづか） 匹夫（ひと） 野夫（のび） 走卒（しゅうそく） 誹（ひ）
 謗（わ） 侮辱（おとし） 獨立自尊（どくりつじぞん） 獨立獨歩（どくりつどくぽ） 唯我（ただわれ）
 獨尊（どくそん）

○職業は性質の向く方面

近來何うしたものですか知りませんが、大變に實業流行の世の中になつて参りました、かうなりますといふと權兵衛も太郎作も兎に角實業萬能といつたやうな鹽梅式で、自分の性質も知らずして無關矢鱈に實業界に飛び込むつていな方式で誠にハヤ困つたものでふいます、併しそんな者を先方でも雇ひは致しませんが、這入らうと

いふ方でも餘ッ程自分の性質を考へねばなりません、何も實業界でなくば飯が食へぬと相場が極まつて居りはせぬことだから、學校の教師が適當な性質でもつて實業界に這入らうなとは間違ひも甚だしいと云はねばなりません、全体學校を出てからばかりではふいません、初め中學校を卒業したとき、さてこれからはどんな修業してどんな方面に向はうとするかをチャンと一定しました上で、何んとか目的を立て専門學校へ這入るやうにしませんと飛んだ失敗を招くもので、これをせぬから大概の者がしくちるのでふいます、まアいふて見ましたら自分は果して實業界に入るべき資格があるか、乃至は工學を修むべき性質であるかを能く考へんければならぬので、丸い穴に四角な物が這入るといふことは決してないものだから、こゝを篤ッく考へた上で方針を極めたが上々分別かと存じます。一体がこの考へを

せずして無闇と學校へ這入れはよいことにして入り込むから卒業してもトント不向
 きに出来上つて折角の資本も臺なしになるなどは智慧のない加減とはいひながら氣
 の毒なことではありませんか、オヤ／＼飛んだ憎くまれ口を叩きましてこれは御免
 を……………。

(抜萃) 萬能

○商賣道は六ヶ敷い

實業萬能と前辯士が言はれたのでチヨット思ひ附きました、さう言はるれば尤も
 至極の次第でムいまして實業即ち商賣學と申しますものは、さう思ふたやうに簡
 單なものではムいませぬ。第一番には經驗がないことには何の役にも立ちませぬ、

次には敷理の道にも餘程長けん居ねばなりません、イヤ愛嬌も無ければならず、チ
 ヨット物を言ふにもその言い廻しが上手に出来て居らねばならず、取引先の人の氣
 嫌氣襖を取ることもが上手で無ければならんとか、イヤ人を嫌がらせる事は決して言
 はぬやう又應對振りには最も巧妙で而して手練手管の手十八手、裏表合して八十八手
 といふ、オットこれは女郎のことでありませぬが、まア云つて見ればこの位の資
 格が備はつて居らねばなりません。多くの職業から申しますとこれ位混雜し
 てヤ、こしいものはムいませぬ、決して皆々が思ふ様に何の雜作も無いこと、考へ
 るのは、大した間違ひなのでムいませぬ、だから初めの程は何んでも角でも實業界
 に限るつていな有様で、義經八艘飛びもそこ退けといつたやうな勢いで飛び込んで
 來ても、マカが一年か二年経つか経たぬに、ハヤ嫌になつて元の御座へ御直り候

つてな塩梅で、式三番双宜しく罷り退るのが多いのでムリます。これらが乃ち這入るときに思つたことと、這入つてからの實際とが雪と墨だつたものだから、さてこそ面喰つて泡吹いたのでムリします。斯様な次第でムリますから正真正銘實業にでも従事せやうといふ方は、先づ這入る前に當つて實業界とは如何なるところであるか、又どんな仕事をするものかといふことをシツカリ研究した上で、愈々どて迄も遣り遂げやうと決心した曉は、所謂その仕事の爲めには何處までも働さ、何うしてもコイツを仕遂げると云ふ覺悟をせなければ駄目でムリです。尤もこの決心は何も實業界にのみ限つたことではないのでムリです。オットこれは釋迦に説法御免候へ御免候へ。

拔) 数理—理學と數學。 手練手管—海に千年山に

萃 千年合して三千年。

○驛夫は法學士

とは亦酷いことをいふと思召すかは知りませぬが、かうなつてこそ始めて國が盛んになるものでムリです。エ、さて伺ひますが、我輩はエヘン學士で候と學問とかいふものを肩に着て、縮髭を捻くり廻つても、御前に候と太郎冠者が出掛けて來るものでもなし、又使ふてやらうと云ふ所もなくつては誠に致方のないものでムリです。さればこそインマに法學士の鐵道驛夫や、一段上つて小學教育なども出来ることだらうと實は内々楽しんで居ります。オットこれは秘密でムリまして公言は致しませぬ……。冗談は抛つて置まして、斯様になるといひますのは一面社會

が進歩するからでもありませんが、今日の世の中は決して學問や肩書で實際の仕事は出来ないものだど考へます。斯く申しますると彼奴は學問もなく肩書もないところから岡焼半分の法界悋氣で吐かすど御考への方もありませんが、決して左様な卑屈から申すのではいませぬ。論より證據、物は試めしで御聞き下されい、彼當時流行の實業界の仕事なんどと申しますものは、拙者は學士でゐると三尺高い木の空で……、これはしたり大變なこと、マサかはりつけでもあるまいし……、高いところへ止まつて居たところで出来るものではない。何故と申しますると假令物を賣る方の側は學問があつて學士の肩書があるにしましても、華主は教育があつて、悉くが學士の肩書がある人ばかりではない。中には天保人間もあらうし、……誰方ですか其等邊變でエヘン〜と變な聲を出す人は……、無學

文盲な奴も居ませうし、斯く云ふ拙者の如き肩書のないお方もありません。たやうな鹽梅でいいますから、肩書のある人に許り賣つて、肩書のない奴には賣らんといふ譯には参りません、ヨシ譯に参つたところ、それでは早速口は干上りになりけり、人間の干乾しが御座いといつたやうなミシメな態になるより外仕方もないといつたやうな有様でござせう。……未だ喋舌りたいが、何んだか低氣壓が不穩の様で、關撃にでも遇つては命が惜しういいますからこれで御免……。

(抜萃)

太郎冠者

○車挽くとも恩人作るな

詩を作るより田を作れといふことはあるが、車挽くとも恩人作るなどは如何にも難なこといふ奴と思召しませうが、これは實際眞理とやらいふもので、決して粗そかにけ思はれぬことでふいませう。こゝでは一つ有名な井ノ角即ち當世の羽振紳士、炭鑛漁船會社の専務取締役たる井上五郎君の言つたお話を受賣りして合點の參る様申上げることに致しませう、子曰く……オットこれは孔子さんか……では氏の曰くに、自分は今日迄決して人から金を借りたことはない、たとへばそんなに困つて首溢るやうにならうが未だ決して金は借り無い、若し食ふ物が無かつたら食はずに居る許りだと思つて居たので、天下宇宙如何に廣しといへども私に金を借した者は一人もあるまい、……コ、テ拙者が申上げるが、井ノ角さんはさうであらうが、若し拙者だつたなら、如何に借りたいと思つたところで天下廣しと雖も貸して呉れる心配

はないので、決して負け惜みから申すのではなく、これは正眞正銘の井ノ角氏實談だから、どうぞそのお積りで……それで現今になつてからといふものは、自分の處へ時々青年がやつて来て、金を貸して貰ひたいとか、イヤ呉れるとか言ふ者があるから、その度毎に斯様云つて教へてやる。

「荷くも多少の問をした者が人から金を借りるとか、貰ふとか、世話になるとか云ふことは甚だよろしくない、食ふことが出来ないなら、玄關番をするなり、筆耕をするなり、相當に働いて報酬を得るやうにしなければならぬものである、假令人力を挽くともよし日傭稼になるとも、決して人から恵みを受けるものではない」云々と、申して居られます。如何様これは尤もで御座いませう。考へても御覽せ、世の中に恩人を作ると云ふことは、それだけ自分の身分を狭くして、自分の成功を妨

ぐるばかりではありません。延いて他日業成り名を擧げたときに至つても、思ふ事も言はれないとか、思ふ儘に振舞はれぬとか、それはく要らぬ氣兼ねをせなければならぬのだから、さてこそ車挽くとも思入作るな……。

(拔萃)

○人生奮闘の最終目的

分り切つたやうでその實は分り切らぬ人間が、その生れて來てからの奮闘なるものがその最終目的とするところは果して何であらうかといふことを一つ遣つて見ませう。イヤもう金が欲しいくと云つて來る日もく汗脂になつて働くのは宜しい。が、何か面白い金儲けの工夫はないか知らんと焦りに焦り抜き、苦しみに苦しみ抜

いて心配し、果ては朝から晩まで糞面白くもねむと鬱いで煩悶して居る。イヤこれも強ち悪いとは云はぬもの、全体何の爲めに夫れ程齷齪して金を儲け、金を溜めたいのか、サアこゝでゐる、この點が所論大々の論點とでも申しませうか、それで斯く申しますれば、それは何も譯はないこと、そんなに力まんだとて金を儲けたい金を溜めたいといふのが人生最終の目的と云はると云はるゝだらうが、サア茲でいいます、そのこゝなるものが甚だ情けない次第だらうと存じます、丁度明治の維新頃かど存じますが、専らこんな歌が流行つたものでゐます、千両箱富士の山はど積んだとて、冥土の土産になりやしないといふので御座いましたが、如何です成程穿ち得て妙ではありませんか、今日此頃の極端な黄金萬能主義の人々に……おつた諸君も何とを捉へて言つたのではありませんよ……、ちつとこの歌を謠はせて見

と斯様な標題を付けますと、當り前のことだ、誰れが準備なしにやる奴があるものかと仰つしやる方もありませうが、それは勿論のこと、何も結納とか宴會費とかの事を申すのではなく、總べてに於ける用意が出来上らないうちの結婚は飛んでもない失敗を招くのみではなく、非常な弊害であるといふ分つたやうな判らぬやうなことを一言致したので御座います。といふのは此の頃歐米諸國では頻りに「用意の出来ない結婚」といふ言葉が流行るさうで御座います。これが歐米に限らず日本でも段々どこの弊害が多くなるやうに見受けします、さアそこで御座います。おへん、全體社會の生存競争が段々と激しくなつて参りますと、青年が獨立生活の地位を得るといふ時期がそれに伴つて次第々と遅くなつて來るもので御座います。が、さればと申しては、ア成程と委細畏つて素直にお受けする者はまア無から

うと申しても宜しい位、何故かと申しますれば、これ許りは何とも仕方のないもので、そこが人間本性的の然らしむるところでも申しませうか、或る一定の年齢に達しまするといふと、なか／＼何うして獨りでぢつとは致さぬもので、何となく女戀しさの情から結婚を要求するもので御座います。さうなると仕方がないから兎も角といふのでエ、加減の……おつとこれは失敬、決してその……女房をまア當てがふと致しますか、斯様になりますると順序上何とも止むを得ぬから早くも子供が出來る、とはいふもの、未だる／＼一本立ちでさへ遣れさうの筈はないのに、況んや獨立の世帯を張つて生活するなんてなことが出來んから、何うしても彼うしても暮らしの道が立たぬやうになる、そこで脊に腹は換へられんといふところから人の厄介になる、とまアいつたやうな次第で御座います、それ斯様なことを歐米では

「用意の出来ない結婚」と申すので御座います、全体歐米で例の社會主義で御座い
 どうか、何々の不平團體で御座いとかいつて、手前味噌を并べて自分の都合がよいや
 うなこと許り言ふて居る不良の徒を片ツ端しから調査して見ますると、驚くでは御
 座いませんか、何れもこの「不用意の結婚者」がその本家本元となつて、煽て揚げ
 るといふのが、所謂生活が苦しいからで御座います、苦しいといふのは自分の不
 簡から招いた弊害だから仕方はないので御座います。しかし日本の國家に於きまし
 ては、彼の國とは根本に組織が違つて、彼れの個人單位に比べまして、幸ひにも此
 方は家族單位と申すので御座いますから縦し斯様な不所存者があつたにしろ、子供
 が生れたが養ふことが出来ない、いや教育することが出来ないと申しますると、
 親類者縁と申しまする者が寄つて集つて、仕方がない、彼奴の不甲斐ないに依ると

はいへ、生れた子供が可哀相だからつていなことで兎も角も互ひに助け合ふ習慣に
 なつて居りますから、有難いことには彼の國のやうなあんな弊害が社會にはあま
 り現はれませぬので御座います。といつて樂觀した日には何の事だか薩張り譯が分
 りませぬが、斯様な次第となりましては個人の發展ばかりではなく、延いては社會
 の進歩に對しどれだけの障礙になるかは知れたものではありませぬ、何故かと申し
 ますると、自分の技倆とか經驗とか乃至は修養といふものを十分積まない中には
 や一家の生計に大切な頭を使ふ、いや腦髓を惱ますといふことになりませぬから、
 人生最終の目的たる遠大の希望はなくなつて仕舞いましていやもう目前の事にはか
 りあせるやうになりたがるもので御座います。しかしそれ切りで濟めばよいものゝ
 間違へば苦し紛れに飛んでもない考へを起し、ひよんなことに身を沈めるやう

は肉慾又は情慾といろく名のある慾望を満足することが、後にも前にも人生唯一の快樂であると、外に何等精神的快樂を求めやうともせず、又趣味を勉めて持たないやうにする人は、假令その人の地位や、技能が如何程絶大絶群の人であつたにせよ、斯る動物——決して人といふ資格は御座いませぬ——を稱して最も下劣な身分の者だと思ひます。これはしたり餘り口がすべくり過ぎまして恐れ入ります……、が、しかし、そりや大能慾の人間であつて、木の股や石塊から生れて來た者ではないので御座いますから、ちつとやそつとは構ひも致しませんが、あんまりこれに凝ることが悪いと申すので御座います、彼の先刻お話がありました現金主義又の名を拜金宗崇拜者、即ち唯もう金を溜めることにのみ齷齪して居ります者や、又は不用意の結婚をして他人様の御厄介になるといふ甲斐性なしの人間は、どちら

になるから、それだけ大切の社會人員を減らす勘定になるので御座います、いやとらも私こそ飛んでもない長談義失禮いたしました。

(萃 拔)

- 弊害——惡弊害毒。『用意の出來ない結婚——』
- ンプループメントマリッジ。生存——人生存在。本能
- 性てしむるせいよはつ。社會主義——貧富平均主義——勞働者
- 萬能主義。樂觀へいきてく。障礙さわり。技倆うてまへ

○最も下劣なる人間

段々と長いところでお話があつたやうで御座いますから私はその中でちよいと感心したところを一つ短く申上げて御免を蒙りませう、一体全體肉體即ち色情若しく

かど申しますと皆この肉體慾に憧れて、外の高尙な快樂とか趣味とかを持たなかつたに原因した劣等動物だらうと存じまするそんな罪のないこと許りなら未だしも、その他ありとあらゆる總ての罪惡といふ罪惡は何れも皆これから起るもので御座いまして、日々の新聞雜報も悉くこの種記事の外にないといつて差支へが御座いません、いやもう實に呆れ蛙の不如婦で、慨歎どころの騒ぎではないかど存じまする、といふのも皆今日の社會が悪いので、餘りにその物質主義に流れ過ぎた結果、少しも精神的快樂を求むる風習のないのに起因するかど存じまして、甚だ險惡なやうに危いやうに見受けまします。

(萃拔)

快樂

絶大絶群

下劣

下等劣等

物質主義——現物主義。

○英雄豪傑は摸倣するが嫌ひ

全體當世の人間は兎角自分で自分を稱して英雄豪傑である、又はたらんことを望むものが多いやうに見受けまします、則ち自分は東洋のビスマルクで候の、グラッドストーンだの、ピットだのと傲然自稱してちつとも憚らないので御座います、が、實際は斯様な大言壯語を吐す奴に限つて、得てして腹の内はどんがらの虚空といつたやうなもので、只もう化の皮を被つて居る動物に過ぎないので御座います、だからその化の皮といふやつをぐるつと一枚剥ぎ取つて見ましますといふ……と或ひは千枚張りといふのもありませうがこんなのは手數でも仕方はないから一々千枚剥ぎ取るのですな、いや御面倒なら本職の穢多皮屋のいふのを引張つてきてお構ひませんよ

……それはくほんのもう平凡至極な人間と相場は極まつて居ります、ところが正眞の英雄豪傑とも云はる、様な人は決してこのやうな安つばい者では御座いません、所謂標題掲げましたる如く、眞の人傑とも云はる、人は決して他人を摸倣することは大の嫌ひなのであります、その証據と申しますのは彼の近世の英雄豊太閣であります、すなはち東國に下つて將倉を通りましたときのこと、右府大將頼朝の塑像を見まし申されるには、汝と吾とは共に天下の政權を掌握したものでちよつと相似ては居るが、そも汝は名門の出身であつて、傍らに侍する良臣智將雲の如きであつたけれど、吾れは匹夫から起つて空拳で以て天下を執つたのであるから、つまり云ふと吾の方が餘つ程偉いのう、どつた風で意氣軒昂、鼻の高くなつたこと何千丈といつたやうなものであつたと申しますが、これを見ましても眞の英

雄豪傑は決して他人を眞似ずして、吾れは吾れ、人は人といふ確固とした見識があることが分るではありませんか、これ位で御免を蒙りませう。

摸倣まぼ 傲然おほ 自稱じふん 大言壯語たいげんさうご 言語

の壯大。 虚空こくう 塑像そざう 掌握たさ 名

門かど 名家門葉めいけ 空拳くうけん 意氣軒昂いげけんぱう

見識けんし 意見識略いけんしりやく

○處世の才

人に打ち勝たうと思ひますればこの處世の才といふものが屹度要るもので御座ます、で、處世と申すことは一口に云へば世渡りの術で御座います、なか

國の廣大なもので御座いますから、従つてその才といふことも一々證明しますれば限りは御座いませぬ、そこでその中の一部分を取つて茲で一言演べたいと存じます。ぬ、昔からの諺に斯様なことが御座います。家に家風あり、國に國風ありといつてありますが、成程これは世渡りをする者が能く了解して居らねばならぬことでもういます、此の節随分騒いで居りまする米國の日本人排斥なども、つまりこの諺を應用せなかつたから起つたのだらうと考へます。何故かと申しますると日本には日本の風俗習慣があり、彼の國には又彼の國の風俗習慣があるもので、ちよつと申しますれば、日本では禮をするに首を曲げるとか、食事をする時には一切話も笑ひもせぬとかいつたやうな鹽梅式で、種々様々ありまするやうに、彼の國ではまた種々様々と極まつて居つてしかもこれが反對に出るのが多いので御座ります。

る。則ち禮をするときに首を曲げる。なんかは大變な失禮で、食事のときは可成賑やかに食ふといふ如く、悉くでもないけれども大概は異つてをります、そこで日本人が若し向ふの國に行つて日本の風俗習慣をその儘に實行して居つたとしますればこれ取りも直さずその國の風俗や習慣を無視した無禮の振舞であつて、その國人が喜ばんのはこりや當り前のことだらうと存じます。丁度これと同じことで各々の家でも夫々家風があるもので御座いますから他人がその家庭に這入つてそれを無視しましたなれば、大變にその家人は困るで御座いませう、否な困るのみではなく却つて不愉快に思つて少しも打ち解けて呉れませぬから非常の損であつて手持無沙汰の目に會はねばなりません、斯様な次第でありますから、處世の方法など云ふものはつまりぬどころにあるもので、つまり些細のことに至る迄能く注意して、

郷に入らば郷に隨へ、の式を守つて相手の氣嫌を損ねぬやうにするが一番だらうと考へまする、ここで御免を……。

(萃抜)

範圍

了解

無視

○酒に酔ふても空氣に酔ふな

酒は酔ふ爲めに造られてあるので、これを飲みまして酔ふのは更々不思議はないので、空氣といふやつはそんなに酔ふやうな悪い分子もなければ、また麻痺さするといふ分子も這入つて居らぬ筈であるのに、この空氣に酔ふなどは飛んだことを吐す男……さういふお前こそ酔ふて居やせぬかと仰つしやる

方も、いませう、如何様これは絶対に酔はぬとは保證も出來ませぬ、が兎に角さういふものかその不思議などお考へになる空氣に酔ふてふらぐの千鳥足つていなイキな眞似をして居る人が随分と澤山あるので、否、世人の悉くがこれのやうに私は見受けまします、則ち學者から實業家乃至は政治家に至る迄、みんなが皆空氣に酔ふて大方は中毒を起して居るので、此のところが、こいつが亦變で、丁度酒飲が自分の酔つてゐるのを知らぬと同じく、空氣の酔漢も亦自分では頓とお氣が付かないのだから可笑しいぢやないませぬか、それで、氣は付かぬのだから無理もないことながら、それで以て如何にも一簾の物知り顔に喋舌り立て、居るのだから尙更ら堪まつたものぢやないませぬ、ところが根が酔つてゐるので、いませぬから、理屈も何もあつたものではなく、いやはや手の着けやうもあつたものでは

ありません、それで正氣の人の顔が七つにも八つに見えるのですから、ご自分の事は棚に上げて彼奴は可笑な奴だなんかと悪口を吐く、いやもう正氣で眞面目な人こそい、面の皮ではふりまするが、このやうな人間は困つたことには酒とは異りまして、手桶の水といふ貴重な輕便な甘露一杯では容易には醒めつてはありませぬ、醒める位は少々遅れても構はんが恐ろしい物で、空氣に酔つたが最後大概は中毒を起しました儘それなりけりて往生して仕舞ふものでふります、なんと不思議で氣味の悪いものではふりませんか、ところがこの酔漢が追々蔓延して來る兆がありまして、大概の人は始めのうちこそ空氣を旨く呼吸して悪い分子は悉く吐き出して居りましたのが、いつとも知らず感染して酔つたと存じます、斯様な次第で最も不思議に傳染力が烈しうふりまして恐ろしい以上は特に今後の青年方に一大

注意を煩はしたいので、餘程警戒が肝腎でふります、如何様かう申しますると酒なぞに酔つたといふものは極く輕少なもので、その場限りいふものだから構いませんが、空氣こそ未來永劫浮む瀬のない奴でふりますから、何處までも酔ふなど申すのでふります、いや下らぬことを長々と……。

(萃拔)

麻痺 絶對 永劫

中毒

蔓延

感染

○妻を迎へるなら中年の女

當世でも云ひませうが、當節柄これはまたきつい誤まつたこと、考へますのは、世間の人の多くは三十歳にもなつて十八九歳の妻を迎へます、が、これは多

少恕する點があるどしましてからが、甚しいのに至つては五十歳にもなつて、歳前後の若い妻を迎へるのを見まするこれはなんとも奇怪至極の事だらうと存じまするといつて、拙者許りが力味返つて見ましたところで、世間の人一般は別に蚊がさいたやうにも思はず、のみではふいませぬ少しも怪しませずしていや成程御尤も至極で……、全体女房といふものは十二三は若くなくてはなりません、抑々女といふものは將來になると兎角に早く老けたがるものなんかんと飛んだところに變な理窟を付けまして、却つて大賛成をするといふ、いやもう不思議な世の中となつて参りました、成る程、これも一方から考へますると一應は理窟がないでもありませぬが、ねへん、全体結婚問題なるものは、抑々人間一生の大禮でふいまして、浮沈生死をこるではなく、末の松山波こさじと契る交情でありまして、最も虚心平氣で以

て考へねばならぬ、大問題ではなからうかと存じまする、そこで、拙者が斯様な標題をつけまして一言をこころぢやなく、大々的鼓を鳴らして怒鳴る理由でふいます、……なわに貴様が怒鳴つても恐いものかど……いやさう仰つしやれば仕方はないもの、……考へても御覽せ、昔のやうに女といふものは單に男の玩弄物……おつと失敬……、只もう慰さみ物位の花活け的な考へなら兎も角、またはお坊つちやん育ちの生活なんかは、少しも掛構ひのないといふ、謂はゞお平の長草ども申すべき若殿輩が、末の妹か娘かと云ふやうな若い奥様を迎へ、丁度内裏雛の一幅對のやうな積りで面白可笑しく暮らして行きまするのなればまあ、異論もふいますまいが苟くも活社會に飛び出しまして大々奮闘をしやうと云ふ人間には斯様なる若い妻君は自ら求めて桎梏を嵌めるも同じことぢやないかと信じまする、まあ論より證據で

ムいまして手近い例を申しますと、何か会社へでも勤務して居る人が、俄かの急用で東京へなり大阪へなり出掛けねばならぬとしますと、相應な年老つた妻君ならちよつと電話でその事を通知さへして置きますれば、愈々出發といふ間に宅へ立ち寄りさへすれば、行李から何かからちやんと用意がしてあつて、さアすぐ出發とさても何の不都合もないものゝ、これが未だ世故に長けぬ若い妻君、所謂十五も二十も相違した娘さんであると、なか／＼さう手輕には参りませぬ、自分であれふた立ち歸つて何かから何まで萬端指圖した上、すぐその足でもつて出掛けねばならぬ、いやその上兎角ちよつとの別れでも悲しんで糞面倒な、停車場位へ見送るといふ、仕方がないから自分で車も雇つて遣る、いや停車場のプラットフォームへ入場する手續もしてやらねばならぬといふ、いや到底活動的人間の堪得る所ではなからうか

と考へまする、こんな風ですから萬事に骨が折れて、抑々妻へるものを迎へた眞意、これが却つて足手纏ひになるといふ更に分けが分らぬではいみせんか、そこで以て拙者が妻を迎へるなら宜く中年の女を娶るに限ると申したので、よつく判りになりましたか、ねへん……。

(萃抜)

中年 恕す 浮沈 虚心平氣
世故 のこと

○夫婦年齢の大差は大きな不幸

前辯士は中年の妻を迎へるとの御注文でいいましたが成程はや御尤もさまで、拙者も双手を擧げて大賛成いたします。したが、も一つ若い妻が如何に不幸であるか

といふことを重ねて申上げますから、御嫌でも暫く御清聴を願いたい、抑々夫婦間の年齢が大變に相違する、所謂若い妻を迎へると申しまするは一層進んでいひますると、一面に自分から趣味思想の差を生ずるといふ大不幸が生れて來はせないかと考へられまする全體夫と妻とが個々別々な趣味思想を以つて居るといふことは、人生の共同生活といふ本義から大いに反いて居はすまいか、斯く申しますると、何も年齢が違つたからといつて、趣味思想に於て全然相違するといふ理由はないもので、初めからその邊に注意して娶りさへすれば何もそんな不幸は湧いて來はすまいといふ人もあるけれど、これは唯皮相な觀察であつて眞理を穿ち得たとは申されないので、是れを以て、何故かと申せば、全体年齢の差といふことは時代精神の差を表はすことであつて、時代精神の差は勢ひ趣味思想が何處かと相違するといふことを

いはねばならんかと存じまする、これが抑々の不幸で、兎に角何方にしても、餘り若い妻を迎へるといふ風は宜しからんことで將來活社會に這入つて奮闘的生活を送らうと思はれる人々は前辯士所説の如くよく、此の邊を考へねばならんかと存じまする、趣味思想の相違は、夫婦間脊理の大々原因であつて得てして飛んだ間違が起るのは、皆こゝからだと存じまする、只もう懦弱なる風習と、僅かな劣情とに驅られまして一時の樂しみに耽るといふ愚は、取りも直さず自分が將來の活動を自分から擒束するものであるといふ覺悟を持たねばならぬと、あらくちよつと前辯士に付け足しをした考へで、是れを以て、

(萃拔)

思想 擒弱

趣味 劣情

皮相 懦弱

時代精神

○今日青年一般の悪弊

もう青年悪弊だとか何だとか、さうく攻撃をせなくても差支へはなからう、吾々にはいやはや耳にたこが出来る程聞いて居るから御免だと申されるか知りませんが、なか／＼何うして、未だ／＼あれ位ではお赦しす譯には参りませんから、まあ暫らく御辛抱して偶には清涼劑だ位のところで、御聴きを願ひます、大体今日の青年を見ますると、學校教育を受けて完全な學問を修めて居られますから、外見は頗る立派で、いやもう何の仕事もさしてもすつぱり／＼やつてのけさうに、おまするが、さて實地に當らせるといふと、何の役にも立ちませぬ有様で御座います、これを譬へて申しますと、丁度頭ばかり動かして居て手足はちつとも動かさ

ぬといふ張り子の虎すつくりであるから驚くでは御座いませんか、……彼奴吾輩等を侮辱しよる、失敬な奴だ、忠臣藏ではないが鮎た鮎た鮎武士だの格で、一つ仇討をやらうかなどは眞平御免を蒙りたい。……これでは、如何とも致し方がないでは御座いませんか。こゝが則ちその悪弊と申した理由で、決して憎くまれ口を叩きたいことはないが、眞實底からの意見だから仕方ないでせう、彼の工業界なんどに於ましては殊の外實地が必要で御座います、理想なんどは謂はゞ何うでもよいので御座います、例へて申しますと、機械を拵へるのには徒らに理想ばかり高くて、手先さが動かぬでは、到底も完全な機械が出来上るべき見込みがないでは御座いませんか、それと同じく商賣人だとして矢張り實地が大切であつて、理想なんどは寧ろ何うでもよいので御座います、斯る次第だから、以前から度々承るやう

ではあります、兎に角實地の修養に最も重きを置かねばなりませんので、彼の理想を養ふ讀書所謂本を讀むんとは、唯々稱どもすれば、乾燥無味に荒まうとする頭に、一服の清涼劑、一掬の清水を注ぎ込むといふ考へで、精神修養の資本にしたなら宜からうかと存じます、いや妄言多謝々々。

(萃拔)

悪弊 味

清涼劑 一掬

理想

乾燥無

○奥様は働かぬもの

なんぞ、は、大變に開けたことをいふと思召したならそれこそ大間違ひ、實はこんな弊風があるのを例の糞八喧しい口調で叱らうと思ふのだが、始めから弊風など

、標題を掲げますれば、おはん例に依て例の如しかなど。彼方向かれては大變だから、ちよつと茲許權謀術數といふ奴を使つて故意つと乗せたは諸君こそ誠に善い面の皮と先づ大序に笑つて置いて、さて申し上げます、一体我國現今の社會では、少し夫の身分即ち宿六なるもの、位置がよくなるちうと、その妻君はすぐ奥に引つ込んで仕舞つて、召使なるものを使つて得意がるといふ風習があります、そこで以て従來は内儀さんであつたのが爾來は奥様の尊號を奉るといつたやうな次第で、考へて見ますると實に奇態千萬な風習と謂はねばなりません、これが亞米利加邊りな邊では、大概な家庭では主人が自ら立關番を兼ねて取次ぎにも出る、また、妻君は自分でお三どんから仲働きの代理をして臺所一切は申すに及ばず、買物にでも出掛けるといふ風習なさうでいます。それに何うでいます。萬事が西洋々々と真

似る吾が國中流以上の家庭では、苟且にもその妻君と名のつく者が、ちよいと出て買物したが最後、「おやく、彼處の奥様はほんとにまア奥様らしくないこと……」などいって世間が笑ふから堪まりぬ、いとゞさへ虚榮の塊とも云はれて居る女だから、そんな噂をせられると自分ばかりの恥辱ではなく、夫の顔に泥を塗るやうなもの、いやもう大變なところに理窟をつけ、一切駄々張り込んで浮々用足しにも出ねば又出ることが出来ぬやうに社會がする、こんな下らぬ悪習が纏ては種々の方面へ悪弊を及ぼすから堪まりつことが無いませぬ、未だそれ許りではなく、中流以上の玄關で「頼まう」とか「御免」とかいつて客の聲がしますと、すぐ其處に御本尊たる主人や妻君が居るのにも拘らず、態々手を鳴らして召使を喚び寄せると、いふ廻り遠い取次ぎ方をやるのでいます、これはつまり奥様が取次ぎをするとか、

飯炊きするなどは、折々体面上輕々敷見ゆるのみではなく、肝腎の品位にかゝはるといふ厄介千萬な風習でいます、絶對的働かぬを以て本位となし、只もう何をすることもなく青白い顔して引籠つて居るといふ怪しからん譯からであらうかと存じます、世間も世間だが自分達がこれに勝てぬといふ風習は何處までも打さ壊して仕舞いたいものであります、とまア一つ申上げて置ませう。

(萃抜)

權謀術數のいろいろ

品位——品格位置

○下女の爲めに下女が附く

下女の爲めに下女を置く奴が何處の世界にあるものか、なんだから頼珍漢のこと

許り喋舌るが何うかしては居らぬかと不審がる方もありませうが、實際だから仕方がないのでムリです、前辯士の御説の如く奥様は働かぬものといふことであつて見れば、私の申すのも満更ら嘘ではなく、否な嘘どころではないので、實際今日の中流以上の悉くはかうだから不思議では無いませうか、つまり前辯士が言はれた如く主人や、妻君が自分で遣つて宜いことも、召使ひにさせる、そこで餘計な召使を置くから、順序上また餘計な手数がかゝることになる、餘計な手数がかゝるから費用が多くなる、のみではなく用事がその爲めに多くなるといつたやうな仕儀は、これは物の連鎖として當り前かと存じます、斯様になりますから三人使へば宜い筈のところを、四人も使はなくてはならぬといふのは、こりや又物の道理でムイませう、さアこゝです、これが即ち下女の爲めに下女を置くといつても差支へは

ないでは無いませうか、こんな馬鹿らしい計算になるから誠に怪しからんと申さうやら何と申さうやらいやもう不思議千萬な次第であつて、凡そ我が日本のやうに澤山な下女下男を使ふ家庭と申すものは、世界萬國何處を尋ねて見てもないといつて差支へはなからうかと考へます。尤も支那邊りは別でムイですが、兎も角ここを何とかして改良致し、三人使つて居る家は二人に減らし、二人使つてゐるのは一人にするといふやうに、悉く反對の方角に進化しましたなら、經濟社會に及ぼす影響はどれ位だらうと、終りに臨んで、大きに法螺を吹いて置きまして御免を蒙りませう。

(抜萃)

連鎖

○仕事の裏表は感心せぬ

仕事の裏表なんかんと、さア飛んでもないことを言ひ出し居ると合點が行ぬでせうか、これは人に使はれて居る者の癖謂はゞ通弊とでも云ふべきもので、なんのことも申しますと、長上の人とか監督役が居る前では、一生懸命眞に忠實らしく見せ掛けて仕事をして居るもの、さてそれ等の人が退いて、影が見えなくなる、いよゝ鬼の留守に洗濯なんかと理窟をつけ出し、直ぐ怠けたすといふ風の事で、これを仕事の裏表と申して甚だよろしからん事で、いふ、實際に眞實底から仕事に精をたす所謂懸命に働くといふ人は、頭の者が見て居やうが、又は監督役が其處らに居まいが、そんなことには一切頓着なく働いて居るもので、いまして、前申しましたやうな人は、殊更ら人が見て居る前では働いて居る風に見せ掛けるもので、いふますが、その實は油取することを専門にして居ますから、仕

事の跡を仔細に調べて見るといふといやはや亂雑至極なもので、ちつとも仕事に親切な點がないから驚くではいふませんか、このやうなことで、はつゞまり他人に對して單に不快な念を起さしむるといふのみであつて、いくら腕があるにせよ、到底立身することなどは思ひもよらぬものだと考へます、だから、寧ろ人の居る前では遊んで居るやうにして、その實人の見ないところで懸命に働らくといふ人で無ければ眞實仕事に親切な人、正眞表裏のない人とは云はれないのでいふます、御合點が参りましたかい……。

(拔萃)

○上役に媚びへつらふな

前辯士が言はれましたやうに、如何様仕事に表裏があるのも悪いのは悪いですが、私にはまたそれよりも一段上はこれであらうと存じます、全体自分の榮達立身を計らうとして、いやもう聞くもへどが出さうなちやはやと、頻りに上役へ媚び諂らふといふ輩間そのまゝの根性をもつても人には碌な人間は無いいものであります、斯様な人間は能くあることで、種々な遣い物を持つては上役の私宅を訪問する、いや訪問する位なら未だしも、べちやくちやとお舞の塵を拂つて同僚の過失だとか、いや誰れそれは薩張り役に立ちませんなんかと、暗に他人を遣つ附けやうとします、傍ら、自分の榮達を計るといふ、卑劣千萬どころではなく、頭から唾でもひつ掛けて遣りたいやうな人間いや代物があるのであります、全体斯様な人間に限つて心はもう腐敗し切つて、到底防腐劑や消毒した位では直らぬ許りではあります、その

上人の事をいふと自分が何の役にも立たない無能なくせに、すつかり仕事には親切氣のないものであります、と一概にいひますもの、これは自分に手腕があつても故意と隠して怠けるのではなく、手腕がないからこそ何んだか尻こそばゆくておつと濟まして居る譯に行かんものだから、さてこそ心にもない諂らひを遣るだらうと思はれます。……なに大變同情すると仰つしやるのですか、いやこれはどうも恐縮至極のこと、何もそんな積りはさら〜ないので、どうぞお手柔かに願ひたいものでござります。……まあ〜要するにと申しますと、何んだか威張つたやうにはあります、實は以上申します通り媚び諂らひといふのは自分に手腕のないといふことを示す證據であります、誠に外分が見つともよいものではあります、ぬから、自分に手腕ありと信する方々は何卒一切せないといふ御決心を願ひたいも

のではさく……。

(抜萃)

○状袋一枚でも横領罪

いよ一酷い事を言ふ、實に振つた題目と眼を盗んぐり返さるゝ諸君もありませんが
こりや實際だから仕方がないのでういます、實際會社とか銀行とかは申すに及ばず
官衙などに出て居る者が、間々私用の爲めにその巻紙、所謂社用とか公用とかの
封筒を勝手に使ふものがありますのみなりや、未だすこしは怒る點もありません
るが、甚しいのはそれを自宅に持ち歸つてまで私用に供するものが随分と多いの
で御座います、これはいやはや大變な間違ひでういます、抑々一枚の半紙、一枚

の状袋といひましても、すつかり他人の所有で御座りまして、これらは一切社用だ
とか、公用だとかに使ふべき性質のもので御座いますから、それをちよつとでも
私用に供するといひまするのは、取りも直さず他人の物品を盗んで用ふると同じこ
とだらうと存じます、しまするといふとこれを法律所謂刑法に照らして見ます
と立派な横領罪が成立するではういせんか、……いや彼奴は要らんことをほじ
り出して、なんだか物識り顔に裁判官面しやがると、思はれたところがこれは元よ
り覺悟で、そのねへん……とまア大仰に言へば左様なもの、これが紙一枚とか
筆一本だから別段目だぬのでういますが、こんなことが知らずくの間に習慣性
となりまして、他人の財産を何とも思はぬやうになり、そろく筆から墨、墨から
帳簿といつたやうに、追々大膽になつてちよるまかす事を覺えて來ましたらそれ

そ由々しい大事でムいまして、最早その横領罪で候の、物識り顔をする奴だのと平氣の平左に構へる處ころの騒ぎではムいけません、正真正銘に細付きの代物ではムいせんか、いや習慣性にならんと仰つしやつても得てして左様になりたがるものでムいますから、平生他人の器具物品は勿論、些細な状袋といへども、斷じて私消をせない、手をつけないといふ心掛けが一番だらうと、實は老婆心からそのちよつと……。

(抜萃) 成立

○ 隨處世 社會百方面 ○

○ 労働は神聖なり

私の目から見れば、社會に於ける總べての仕事は皆な平等であります、糞がける百姓の労働も車を曳く車夫の労働も、國務に參與して居る大臣の職務も差別はないのである、大臣の仕事が神聖なら百姓の仕事も神聖だ、大工の仕事も神聖だ、然り總べての仕事が神聖である、自分の分相應の地位に安んじて自分で働いて自分で食ふ仕事は神聖で無いものが何處にありますか、近來は追々労働神聖を説くやうであるが、まだなか／＼頭に浸み込んで居るは、口でこそ労働神聖だと言ふて居るが、實際自分で實行する程了解しては居らぬ、此の労働神聖主義が解りさへすれば不平の聲は無くなるであらませう、職が無くつて困つて居ると云ふ人が無くなる、少く働いて多くの報酬を得やうと云ふ様な非望を抱て居つて無理に其れを行なはうと思ふので忽ちに失敗するのであります、自分の身の程を知らぬさへあるに、

此の仕事は高尚で、勞が少なく、彼の仕事は勞多くして報酬が少ないなど、間違つた考へをして居るのが大間違ひの初めではありませんか。

(萃抜)

勞働 神聖 平等 參與 差別
非望

○貧富と學科の選擇

學問をやるには、自己の財力を計つてする必要がありす。假令へば天文學者の如きは、學者として、非常に重んずべきもので、又實際必要なる學問でありす、天學を修めて、直ちに金を儲けて生活せねばならぬ境遇にあるものからは、實際不適當でありす、その又學問財産を持つて、其學問を研鑽して居ても、後顧の憂がな

い者なら、斯う云ふ高尚な學問を修めるが宜しいが若しそれが出來ぬとすれば、先づ其の學問の方面から考究してかゝらねばならぬ文學の如きもさうでありす、つまり學者を撰ぶべきか實務家を撰ぶべきかを自己の財力に應じて、始めから考究して學問はせねばならぬものでありす。

(萃抜)

研鑽 後顧 實務家

○世評を意に介するな

今日では新聞が社會の一大勢力となつて來たが、青年は新聞の毀譽褒貶に左右されちゃいけないのです、誰それは大學を優等で卒業した、誰それは何學校の特待生だ

と云つて褒め立てる、寫真やら経歴やらを載せて素張しい持上げ方であるが、此は新聞の經營者の方から云つたら或る餘儀ない事かも知れんが、青年學生の爲めには餘り稱すべき事ではないと存じまする青年は須らく此等の毀譽褒貶からは超然たるべきものである。大學を一番で卒業したとて何になるか、彼等は未だ未成品ぢやないか、其人が果して偉いか偉くないかは要するに此から後の事だ、社會の實際にぶつつかて見なくつちや分らない、若し學生にして學校の席順を唯一の生命とするならば實に唾棄すべきものである。要するに青年は新聞などの毀譽などに頓着すべきものではない、と同じく其他政治家にしても實業家にしても新聞の批評などは餘り當にはならないものであつて、昨是今非、恰も猫眼の如くにいつても然りである此等の事に心を勞した日には何にも仕事は出來ないから、世論に耳を假さず、と

く進まなくつちや駄目である、つまり今の世に於て處世の要訣は、恰も群衆の中をどしどしと押通して行くやうなものだと思ひます。

(萃抜)

毀譽褒貶 經營者 要訣 群衆
世評 へうはん

○摸範的大偉人日蓮

吾國に於て最も偉大なる人物として、又其の目的を遂行する爲めには有ゆる苦行、有ゆる障害と奮闘したる處の摸範的偉人は日蓮であると思ひます、彼は十八歳の時一身を法に献げて衆生を濟度せんどの大願心を以て佛典の根本的研究に身を委ね、新鋭なる熱誠を以て二十歳の時から南都諸山の靈場を訪ね、三十二歳まで苦學した

而して三十二の時に鎌倉に出で大道演説をして其の熱烈なる宗教革新を宣言したの
 であります、曰く、念佛は無限に墜つるの悪法、禪宗は天魔の属、眞言は國を亡す
 邪法、律宗は國賊である、曰く諸宗無得道墮地獄、法華獨一の利益に依るに若かず
 ど、恰も噴火山の如き勢で有りました、鎌倉は今日で云へば東京のやうなもので
 日本凡ての中心で有りました、而して此の中心に出て北條執權職の信する律宗を
 初めとして日本各宗を彼は脚下に踏むの概が有つて、伊豆に流された時も、佐渡に
 流された時も、彼の信念は磐石の如くに堅かつた、是れ實に日蓮は死生の外に超然
 たる一種動かすべからざるの信念を有したからであります、此の生命を堵するの勇
 氣、死生を超脱するの信念此が天下に大事業を成すものに取つては唯一の武器であ
 ります、或は日蓮が各宗を罵倒して餘す處なきの振舞は、グラッドストーンの所

謂謙讓の徳と背馳するが如くに思ふ人もあるか知りませんが、決してさうではない
 彼は正義のために所謂破邪顯正の自信力の猛烈なるが爲めで有つた、故に宗教以外
 の點に於ては彼は誠に涙脆さ人情暖かなる人物で有つたのであります、吾人が處世
 上に於て一方に謙遜であるのは、取も直さず他の一方に向つて猛烈に突進せんが爲
 めなのではありますまいか。

- | | | | | | |
|-----|------|------|----|----|----|
| (萃) | 進 | 破邪顯正 | 猛烈 | 謙遜 | 突 |
| (拔) | 偉大 | 遂行 | 苦行 | 障害 | 衆生 |
| | 濟度 | 宣言 | 慨 | 超然 | 超脱 |
| | 然として | 脱俗す。 | 罵倒 | 謙讓 | 背馳 |

○厭世思想と宗教

近來の青年には、宗教は活動の妨害となるから、場合に依つては道徳をも顧すして、事業の進歩を謀らなければならぬと云ふものがあるけれども、是れは一方を
見ただけの話ではないかと思ひます、宗教は悲觀的厭世的なりと信ずるのは、信ず
るものの弊害であつて、宗教は悲觀せよ厭世せよとのみは教へないのであります。
一心を修める道徳と、社會の上に行はれる道徳とは別なものであつて、所謂個人と
國家との關係と同じく、個人に發現する道徳は小さく、國家に發現する道徳は廣大
なものであります、近く日露戦争には、正義の爲めには一身を犠牲とし又人をも殺
したではありませんか、人を殺すと云ふ事は不道徳ではあるが、大なる正義の爲め

に殺すのであつて、一國の道徳を發現する上からは止むを得ないのであります、そ
して戦争は正義の爲めに遣るのだから、大なる道徳の發現と云はなければならぬの
です、佛教は慈悲を以て本とする、蛋一正殺してもならぬと云ふ誠めである、けれ
ども、時には一國の爲めに多くの人を殺す事がある、正義の爲めに人を殺すのなら
ば、小の虫を殺して大の虫を生すのだから、是れは大慈悲と云はなければなりません
ぬ、宗教を信すれば勇氣を失ふとか、或は社會の活動が出来ないとか云ふのは、前
に述べた事を知らない人の云ふ事で、徹底しない議論と云はなければならぬかと
存じます。

(擧げ)

厭世

活動

妨害

悲觀

發現

○道義觀念に乏しき商人

決斷心が早やければ、あれは武士道を遣つてゐると云ひますが如何様武士道で練へられたものは決斷心が早いのでございます然るに商人にはこの決斷心がない、彼等は食うや食すに十萬圓を蓄めて、人が此の品物を買へば儲ると云へば、何うだらうかと云つて躊躇する、が、其れで満足するのかもしれないと思へば、百萬圓も儲けたいと云ふ氣はある、そして決斷が付かない間に機會を失する、是れが日本商人の弊であります。又日本商人の缺點として公徳心が非常に乏しい、外國人は證書がなくとも何萬でも渡すが、日本商人には其れが出来ない、商人の間に掛引が用ゐられるので、一方では金を引出さうとし、一方では其れを引掛けやうとするから外國人が日本商人

を信じないのであります、日本商人に公徳心がないのは、武士道で鍛へられてゐないからであります、然るに斯く云ふものがある、日本の軍人は實に立派な武士道を有して居る、そして彼等は決して昔の武士ではなくて、農からも來れば其他商工からも、それ故農工商に武士道がない事はないと云ふものがあります然し是れまで如何に彼等に道義がなくとも、一旦銃を取つて軍隊に入れば、昔から鍛へられた道に入るが、家に歸れば其の制裁がないから又元のやうになる、是は婦人でも子孫が用ふれば強くなると同様で、決して彼等に本來から武士道のある譯ではないのだらうと考へられます。

(萃抜)

決斷心

つすまこと

機會

り

弊

く

制裁

て

○危険なる拜金家

現今の青年が學業を終了して社會に出で、立働くに就きまして只金さへ得れば足れり、澤山の金を蓄積しやうとのみ考ふるは大なる誤りであります。金をのみ得れば足れりとするは、恐らく米國から輸入された思想であらうが、米國では金は全智全能であり、金さへあれば、如何なる目的でも達すことが出来る、如何なる愉快をも盡すことが出来る、黒も白とすることが出来る只馬を牛とすることが出来ないに過ぎない、何事でも金さへあれば、自己の意の如くなるといふのが、米國の思潮で、所謂拜金宗なのであります。斯く米國では金は全智全能の勢力あるものとしてあるから、世人は争ふて金を儲けんとする、而して米國は自然力即ち鐵石炭等を多く産

出しますから、近年非常なる富を造るに至つたが、今日では、其富を造つた者は、其富を以て社會を腐敗せしめて居る。即ち其金を以て、悪事も善事も爲し、善事も亦悪事となすことが、尠くないのであります。故に前大統領ローズヴェルト氏は、正義人道といふことを唱道しましたが、大統領が率先して斯る聲を發するに至つたのは社會が既に金の爲めに非常に腐敗した證據であらうと思ひます、然らば青年が二も成功を謳歌して、只金さへ得れば足れり、金さへ蓄積せば足れり、金は全智全能なりと考へるのは大なる誤りであることを知らねばならぬではありませんか。

(萃振)

終了

思潮

唱道

率先

謳歌

蓄積

全智全能

誤り

金さへ得れば足れり

金さへ蓄積せば足れり

〇高等海員としての資格

一言にしていひますると海員と云へば粗暴で無學のやうに思はれるが、今日の海員は決してさうではありません。仲々高尚な學理も必要であれば、又随分王侯貴人をも相手にするから、品性の高潔なるは勿論、一通りの禮儀も心得てゐなければなりません。又昔の船乗は山を目當てに進んでゐたが、今日は四顧數千里の大洋を航海するので、方向を定むるに精細なる學理を研究してゐなければなりません。同時に確固たる精神と強健なる身體が必要であります。是れは今更云ふまでもない事ではあるが、海員は狂瀾怒濤を冒さなければならぬ生死の境にあるから、萬難を排して進むと云ふ確固たる精神が必要である。又其の精神に伴ふ健全なる身體の必要な事

は云ふまでもありません。又更に海員として必要なのは英語と數學とである。高等海員は主として外國航路に従事するから英語の熟達を肝要とし、又天文學、航海學を極めるには數學が必要である、それ故商船學校に入學せんとするものは、數學と英語とに充分熟達するを要します。

それから海員として最も必要な事は志操と云ふ事でありますが、是れは普通の意味に於けるとは多少趣を異にして居りますか。海員には社會主義とか身權と云ふ傾向は最も忌む處である、船長が士官や水火夫の一團を御するに當つては、其の組織は凡て軍隊的でなければならぬ、軍人の尊む服従や敬禮の秩序を守る人でなければ船を動かさない、此の點は海員志望者の豫め深く注意せなければならぬ處である。

席上演説

(萃 潤)

強健ツルカ 狂瀾キヤウラン 怒濤ニコウ 熟達ジュクダツ 志操シソウ
 意志イシ 操行ソウコウ 傾向キョウコウ

○文學研究者と外國語

日本人は歐羅巴の何れの國語を學んだが一番よからうかと云ひますと文學の方では英語が一番よからうと思ひます、と云ふのは、英語は日本に於て最も長く行はれてゐる外國語であるから覺ゆる便利も多ければ従つて使用する機會も多からであります、又英語ならば如何なる書籍でも容易く手に入ると云ふ譯でそれと同時に、英語は歐州語中日本人には最も入り易い言葉でありますものゝ、實際深く研究するに

は仲々面倒な言葉であるから、其の面倒な處で頭を充分鍛へてゐたならば、必要上英語以外の國語を一つなり二つなり合せて研究する場合は比較的容易に第二第三の國語を覺ゆる事が出来るのであります、今日本の中等教育に於て英語を必修語として居るのは、蓋し大に意味のある事だと思ひます、兎に角何れにしても文學研究者は英語とか佛蘭西語とか、或は獨逸語とか、歐羅巴に於ける文明國の一國語を覺ゆるて、學問上更に必要な國語があるならば、本來學んだ國語の補助として他の國語を研究するがよからうと思ひます、歐羅巴に於ける文明國の國語は大抵互に關係のあるものであるから一つが可なりに出來れば、第二の國語は何うにか斯うにか本の意味を解する位は、さう骨の折れるものではありません。

(抜萃)

比較的

必修語

補助

○勤儉貯蓄の必要

資本が無ければ事業にも着手することは出来ないものである、而して其資本は獨りで歩いて來るものでない、些少の資本たりとも之を浪費せずして、貯蓄する時に於て初めて大資本となり、大事業にも従事することが出来るのであるから、勤儉貯蓄といふことは立身の基礎、成功の要件ではありませんか、此の理屈は大抵の人は知つて居るが實行をしない、天下には善いことは澤山あり、且つ人は皆之を知つて居るが實行をしない、然らば何故に之を知つて苟も實行しないかといふに、之は其實行の手段を講じないからであります、元來日本人の如く貯蓄が無い國は世界の強國中で少ないのであります、今各國人民の一人に付ての貯蓄額を見ますと、獨逸

は七十九圓、之に生命及火災保險の如き貯蓄に類するものが二十圓、佛國は四十五圓、生命及火災保險に類する貯蓄が十五圓、米國が七十八圓、英國が七十七圓、然るに日本は僅に三圓であります、此の内獨逸は最高位を占めて居るが、今日獨逸の産業の隆昌なることは、何人も熟知する所であると思ひます、而して金は所謂「おあし」と稱し、足が附て居つて、歩いて行く金は駄目だ、容易に去つてしまふ、そこで金が必要なりと唱道する金は「おあし」ではない、決して歩き廻らない金でありまして、此の動かない金を貯蓄することが必要ではありませんか。

(萃拔)

浪費
要件

勤儉——勤勉儉約。

基礎



○活氣と歐米の文明

歐米人は非常の活氣に富んで居るが、我が邦人は活氣に乏しい、概して東洋人と活氣が乏して引込主義であります、之は佛敎の如き厭世的の宗敎が行はれた結果でもありませう、然るに歐米の歴史を緝いて見ますれば活氣が充實して居る、彼の耶蘇が磔刑に處せられても、毫も世を怨むの色がなく、其使徒等も亦極刑に處せられて恐るゝ風を見せない、之れは皆活氣が横溢して居つて、現情に不満足で、社會の改良發達を圖るには身を殺しても尙ほ盡さんとするの精力があるからである、東洋の歴史には西洋の如く障害物を蹴飛ばして蕩進するといふが如き活氣ある事蹟は、極めて尠ないのであります、今又歐米を漫遊して見ると如何なる國々に於ても、議論

が頗る盛であつて、男女ともに談論に戦はし、理想に長じ、主張を持つて居つて、種々の方面に就て意見を發表して居り、車夫馬丁の輩に至る迄議論をして居ります、換言すれば活氣を以て働いて居るのであります、日本では一時議論をするのは大言壯語を吐くと謂はれて卑下せられた時代があつたが、今日では皆沈黙の態であつて又活氣ある者ば急進過激なりと笑ふ者がありますが、急進する意氣込がなくては到底駄目だと思ひます。

(萃 振)

活氣——活潑氣力。

充實

横溢

現情——現今の情態。

障害物

談論

談話議論。

沈黙

急進過激

○活氣と豊太閤

前辯士は活氣に就て慨歎せられましたが、我が邦の歴史を繙きますれば、その活氣の横溢した愉快な人物も決して稀れではありません。現に其典型とも云ふべきは豊臣秀吉であります。秀吉は匹夫から起つて遂に太閤に迄成功した人であると言ふ迄もないが、微々たる草履取りから天下の政權を掌握するやうになりても尚活氣が横溢して居つて、事物に當つて見ねば承知をせぬ、氣が済まぬ、不平であり、不満であつて、六十餘州の日本國をも尙狭しとするに至り、遂に大兵を動かして朝鮮を蹂躪し、尙現情に不満であつて、更に進んで明國をも併呑せんと企圖したのであります。實に愉快なる活動振りではありませんか。秀吉は眞に快男子である。畢竟するに秀吉をして名を千載の下に垂れ、兒童走卒も尙秀吉を英雄として渴仰するのは、別に理由はない、只彼れは活氣があつたからであると存じます。

(萃 拔)

典型たか 蹂躪じゆりふ 不満ふまん 併呑へいどん
 企圖きと 千載せんざい 走卒しゆうそつ 車力馬丁くるまぢやう
 渴仰かつやう

○活氣と成功

段々活氣が出るやうですから、その一活氣と成功の關係は如何なるものかといふことを一言述べませう、日露戦争の結果、我が邦は二十億圓の軍費を消費した、其内十億圓は外國から外國債として借入れたのであります、而して其十億圓の金を毎年年元利を揃へて外國へ返さねばならぬ、之を返すには紙幣でなく、皆金で返すことになつて居ります、然し日本には澤山の金が無い、我が邦の金鑛から産する金は僅

か四千萬圓ばかりであるから、十億圓に對する五千萬圓の利子丈の金も出來ないの
 であります、然らば今後如何にして此の巨額の負債を返すかといふに、之を返す金
 が無ければ己むを得ず、之を品物で返す外はありませぬ、即ち外國へ澤山日本の買
 易品を輸出して借金の代りに品物を取つて貰ふことになるのである、此の場合には
 外國では日本に金が無い、品物で差引をして呉れるといふことを蔑視つて、其品物
 の値を非常に安く付けることもありませう、故に我が國では内地で大に商工業を盛
 にして、品物を澤山外國へ輸出し、其借金を差引勘定を爲し、又外國人に蔑視られ
 て品物を値切られるやうなことをしてはならぬのであります、之に就てはさうして
 も外國の事情に通ずるのみならず、内地でも上下擧つて協力一致の上、事に當らな
 ければなりませぬか、斯くするには是非とも活氣がなければ出來ない、殊に將來社

會に出る、又は現在社會にある青年は社會の中樞を爲すものであるから、青年は特
 に此の活氣の精神が無くてはならぬのであります、活氣なくては、個人としても
 國家としても成功が覺束ない、惜むらくは我が國人は活氣が乏しい、是れは非常な
 る大缺點と謂はねばなりませぬ。

(萃拔)

負債

協力

中樞

○學校と處世術

今日學校では如何なることを教授して居るか、私は詳しい消息を知らないが、學校は
 單に學術を授くるに過ぎないと思ひます、然るに社會に出て見ると、學校で學ぶと

が出来ず、又學ばなかつたことが非常に多いので、のみならず、學校で學んだとは存外之を適用する範圍が狭く、學校で學ばなかつたことが、却つて日常生活に非常に必要で、色々研究を要するものが多いためであり、此點から見ると學校出の青年が社會に出て、他人の使用人となる場合は其長上と仰ぐ者の人格者が、處世の總ての事を暗に教ゆる所がある者であるから偉い人格者を長上と仰ぐ青年は、最も必要なる社會の處世術を學ぶことができるので長上の善悪が、青年の將來に重大なる影響を及ぼすことを大變なものであらうと存じます。

(抜萃) 長上

○學校と社會の衝突

學校に於て處世術の素養を仕込めぬとすれば、従つて學校なるものと社會とがどんなに衝突するものであるか、問題になるので、今假りに大臣の職に就たと思像して見るに、朝から晩迄陸續として客が訪問して来る、實に應接に暇ない、特に議會開會の前後は政治家の出入が瀕繁で一寸の閑暇もない、即ち客と相對して種々の閑談をやる、中には重要な國事を談ずるともあらうが、大抵は有耶無耶の裡に一日一晚を過す、殆ど自己の用事をすることが出来ない、好いた讀書に耽るとか、盆栽を玩ぶとか、自己一身の快樂を取るとを阻害せらるゝことが夥しいのであります、此際如何に時間を利用して自己の職責を十分に盡し、且つ快樂をも取ることが出来るかと云ふことを考へる様になります、此時間を巧みに利用する法は、學校では別に教へて呉れない、大臣になつて初めて自ら工夫をするのである、若し之

を工夫せず、毎日用事もない客と空談をして居つては到底身體の健康も續かず、又職責を全うする事が出来ない、西洋人は能く「時は金である」といふことを口にす、日本人も之を言ふ人が無いではないが、時間の經濟を能くする人は稀でありま、時が金の如く貴いものであらば、金を無益に費さぬ如く、時亦無益に過してはならぬことは明白なることでありませんか。

然るに日本人は一般に時間を貴ぶ觀念が薄い、何時より演説會があるといふ廣告をして置きながら、其開會は大抵三十分は後れる、演説者も亦大抵時間に後れて来る正直に早く行つた人は茫然、懷手をして無益に時間を過さねばならぬ、是等は珍しくない例であります、斯る事は學校では教へないが、世間では平氣でやる、要するに學校で學んだことは社會で應用することは甚だ少なく、社會へ出て研究しなければならぬことは枚擧するまでもなく非常に多いのでありますから、青年は能く之を心得て居らねばならぬことと存じます。

(萃拔)

素養——智識。 想像。 陸續。 瀕繁。
 職責——職務——責任、 空談。 阻害。

○役人何ぞ

大體今日の青年で學問する當初の考へが間違つて居る、學問する人も、させる人も學問さへすればエライ人になれるやうに心得て居るのみならず其の最初の考へは大抵お役人にならうと思つて居るのであります、是は因襲の久しき今尙ほお役人を最上のものと考へて人間の標準をお役人と心得て居るからである幼い青年の頭には、

役人が氣樂で威張つて居て、馬車に乗つたり藝者買つたりして居るのが羨ましく見
 るでムいます、然かしよく考へて見るがよい、役人が何で羨しいか、今時の役
 人は盗人根性はかり強いではないか、柄にもない體裁を飾つたり待合に行つたり贅
 澤一味して居るが、そんな金は皆な不正な金でありませんか、不正な金で無くつ
 て、何で鼻糞ばかりの俸給で遣れるか、賄賂を取つたり公金を胡麻化したり相場し
 たり賭博したりした金で淫亂に耽る役人共が羨すまいと思ふ奴の氣が知れぬのでム
 います、何處迄人間が尾籠で意氣地がないでせうか。

(萃拔)

因襲

のしらべ

尾籠

な

○ 缺點の矯正

凡べて物事には一長あれば一短あるものでムいますから、人に長短のあるのは勢ひ
 免かれ難いところでありませうけれどもその長所は長所で飽くまで發揮し、短所は短
 所でどこ迄も修養して矯正せなければなりません、彼の長所があるから短所を顧み
 ぬといふことは、これは人を使用する者の雅量でありまして、自分自身の云ふべき
 事ではありませぬ、それを、今頃の青年は往々自分に缺點はあるが、また長所もあ
 るから、さう云はなくても宜しからずやと云ふ風の悪い傾向があるやに見受けます
 彼の英雄色を好み、豪傑酒を好むといふことは、つまり英雄とか豪傑とかの短所で
 あつて長所ではないのでムいます、だから、その色とか酒とかを好まぬのに越した
 ことはありませぬ、いや英雄は色を好むとか大功は細瑾を顧みずなど、常に揚言
 して却つて缺點のあるのを人物の如く思つてその悪癖を發揮して得々然として居

るのは心得違ひの甚だしいことであります。全體缺點は飽くまで修養して矯正せなければならぬものであつて、その殊に青年時代に於て矯正して置かないと、遂には痼疾となつ、癒すことの出来んやうになることも限らぬのである、然らば如何にしてこれを矯正するかと申しますと、元より人と癖とに依つて異つて居りますから、一概に云ふことは出来ませんが、唯一言注意しておきたいのはその性癖が缺點であつて、又長所であるものに對しては、單に長所を保存して缺點のみを矯正せねばならぬのでありまして、彼の缺點を矯正せんとして却つて長所を没却し終り、所謂角を矯めて牛を殺すといふ愚をしてはならぬかと存じます。

(萃拔)

矯正かたむ

雅量みやうりやう

細瑾さいきん

揚言やうげん

痼疾こじやく——慢性

○勤續と辛抱の差別

一個所に勤續せよ、出世するには辛抱が肝腎であるといふことは、よく先輩が後進を戒しむる、極まり文句で云います、が、私が考へまするには、如何様この文句は誤りではなく、殊に辛抱なるものは誠に肝腎のことであつて、忍耐と申することゝ一所で云います、けれども一個所に勤續するのが出世の道であるといふのは、果してどうで云いますか、この勤續とか永續とか云ふことは餘程の考へ物で云います。全体困難に屈する人は大成の器では云いませんので、ひとつ踏み堪へて辛抱することとは無論肝腎のことであつて、出世といふのは一面から見ますれば、辛抱の光輝に外ならぬので云います。さればこそ艱難汝を玉にすると申しますのも、畢竟この間

の消息を傳へたのに過ぎません、けれども辛抱と勤続とは全くの別物であらうかと考へます、辛抱せよとは必ずしも一個所にのみ勤続せよとの意味でもなく、又必ずして一職業を永續せよとの義でも無いまん、彼の能く表彰されまるところの一會社に勤続三十年などいふ人が必ずしも辛抱の人であつて、流離轉職十回といふ人が必ずしも辛抱せざるといふ人ではないのであります、でんいますから、辛抱とは唯困難に堪へるといふ意義であつて、この種の人には大概は出世をしまするが、一個所に勤続したからといつて、必ず出世したといふ人は少ないのであります、辛抱と勤続の差別は此の邊であつて能く注意せねばならぬことだと存じます。

(萃 拔)

勤 績——勤 務 繼 續。

大 成——大 成 功。

光 輝

流 離

○使用人の仕事に干渉するな

すべての使用人、譬へば實業家はその店員の各自に夫れ／＼適當な業務を分擔させました以上は、その使用人——店員の思ふ所に従つて充分の技倆を發揮せしむるのが宜からうかと考へます、彼の無闇と店員の仕事に口嘴を入れ、かれこれ口八釜敷き小言を言ひます時は、如何に熱心に如何に一生懸命にやりつゝある店員とか使用人でも、途中で嫌氣を起すものであるから、従つてその仕事を仕遂げるとか又は發展さすとかいふ勇氣を失ふに至るのは屹度でんいます、だから、多くの人を使用するには、最も宏寛たる度量を望むのは勿論、各店員が各その好む所に従つて技倆を發揮せしむるといふ風にしたならば、店員その者も愉快であつて、その店

舖も従つて快樂が充ち満ち和氣霽々の中に商店が發達するのは論の無いところで、
 いま、といひましたところで、その監督といふことは決して忽せにしてはなりません、
 監督勵行の必要と仕事の干渉とを混同するのは萬づ事業の發展に大なる障害
 があるといふことを知つて居ねばならぬのであります。

適當

宏寛

勵行

(萃拔)

混同

干渉

○使用人を譴責するな

干渉をするなどいふことに就てお話があつたが、それと同時に譴責をしてはならぬ
 といふことも、特に注意すべきことではないかと存じます、といふのは譴責といふ

ものは人の感情を害するものであるから、従つてその店員とか使用人の感情を害す
 るのは最も事業そのものに就て損害となることを、夢にも忘れてはならぬと存じま
 す、全体人といふものは、假令如何なる不良のことをしましても、その主人とか主
 長の者に叱られては、餘り心地よく思ふものではありません、然らば斯る時に當つ
 てその主長の態度は如何なる方法を執るかど申しますれば、それは靜かにその者を
 膝下に呼び寄せまして、しかど得心が行くやうに懇々と行爲とか若しくは言動に就
 て諭し聽かせ、併せてその將來の爲めに圖るやう慰めやり、中心から悔悟せしむる
 といふ様に戒しめるの必要であらうかと思ひます、ツマリ斯く慰藉せられた使用人
 その者は、自分の過失を悔ゆると同時に主長の厚意に感激しまして、それからとい
 ふものは一層愉快に一身の心血を捧げて仕事に従事するやうになるのであります。

舗も従つて快樂が充ち満ち和氣霽々の中に商店が發達するのは論の無いところであります、といひましたところで、その監督といふことは決して忽せにしてはなりません、監督勵行の必要と仕事の干渉とを混同するのは萬づ事業の發展に大なる障害があるといふことを知つて居ねばならぬのであります。

適當

宏寬

勵行

(萃援)

混同

干渉

○使用人を譴責するな

干渉をするなどいふことに就てお話があつたが、それと同時に譴責をしてはならぬといふことも、特に注意すべきことではないかと存じます、といふのは譴責といふ

ものは人の感情を害するものであるから、従つてその店員とか使用人の感情を害するのは最も事業そのものに就て損害となることを、夢にも忘れてはならぬと存じます、全体人といふものは、假令如何なる不良のことをしましても、その主人とか主長の者に叱られては、餘り心地よく思ふものではありません、然らば斯る時に當つてその主長の態度は如何なる方法を執るかを申しますれば、それは静かにその者を膝下に呼び寄せまして、しかと得心が行くやうに懇々と行爲とか若しくは言動に就て諭し聽かせ、併せてその將來の爲めに圖るやう慰めやり、中心から悔悟せしむるといふ様に戒しめるの必要であらうかと思ひます、ツマリ斯く慰藉せられた使用人の者は、自分の過失を悔ゆると同時に主長の厚意に感激しまして、それからといふものは一層愉快に身の心血を捧げて仕事に従事するやうになるのであります。

でムりますから、徒らに譴責するのは只使用人を叱咤るといふに止まつて、誠諭するといふことは精神的にその非を悔悟すると同時に、爾後は一層主長そのものを敬慕するに至るといふ一舉兩得の策ではありませんか、これやこれ眞に兩降つて地固まるといふ譬へに漏れないので、人を使用すべきもの、常に心得ねばならぬことかと存じます。

(萃 拔)

譴責 感情 悔悟 慰籍 叱咤
 誠諭 一舉兩得

○ 武士道の一節

武士道に武士は相見互といふことがありまして、義の爲には敵でも尙之を救すとい

ふ美風があつたのでムります、これは武士たるべきものが總て守るべきことであつたが、後には之を濫用して悪を隠し合ふといふやうになつて來、た武士相互の間には互に嫉視することもあり、悪口も叩き合つて居るが、さてそれが町人に對するときは決して悪口せぬ、如何な場合でも決して武士の耻を町人に漏さぬ、不正なことがあつても口を噤で黙つて居るのでムります、是は武士間の相見互といふことが餘りに一般となりて濫用されたので、階級道徳といふものは兎角斯ういふ風に流れ易いものであります、例へば今の華族連中も随分不正な事もあるのである、お互の間には遠慮なく非難もし悪口もするが、他の階級に對しては其惡を隠し合ふのと同じなのでムります、相見互といふことは如何にも美風であるが、之を濫用してお互に不正を隠し合ふようになつてはならぬ、目的の爲めと不正の手段を助け合ふ

て顧みないのはつまり相互に亡ぶることゝなるのを注意せねばなりません。

(萃拔)

濫用

嫉視

非難

手段

○自己を知るは處世の要訣

渡世には世の中の批評などは全く顧みず、自分を守るといふのが肝腎で、他人の批評などを氣にして居る様では何時までたつても其理想を行ふとは出来ませぬ、人が己を知らざるよりも己が人を知らぬことを憂ふといつたものもあるが、私己が人を知らぬよりも己が己を知らぬを憂ひとすると云ひたいと思ふので、先づ自分が自己を知らぬから自己の本分を解する事が出来ない、良い氣になつて爲

すところが自己の本分に違ふて居るのも自己を知らぬためではありませんまいか、それ故に如何なとをするにも自己の良心に鑑みて如何であるかを見たる上で處分する、誰が何と云つたとか、彼がこう云つたとか云ふ種々な誤解を一々説明して居ては日も亦足らぬ、良心の命する所に従つて、どこまでも活動するがよい、君子は獨りを慎むと古人は言つて居るではありませんか、獨りを慎むと云ふのは、自己の良心を見良心の指定する所に向て行動せんとするので、世間を對手とする前には先づ自分を對手として己の良心を知り其示す所に従はなければならぬもので御座います。

(拔萃)

○證文よりは証言

英國の實業社會では、書いた物よりも言葉に重きを置く風がある、即ち十枚の證文よりも吐いた一言を重しとするさうで、日本では口約束位ではなかく、信用することは出来ずして、どうしても之れを書付にして、實印を押して、収入印紙まで貼つて、若し約束に違反したら何時でも訴訟沙汰にするといふ用意までして懸らぬと餘程險呑であるといふ有様で、証文を楯に取て彼此れと争ふ様では、人間が實に卑やしくなる。又證文にないからといつて勝手に約束を變更し言費を蹂躪しやうといふ様な考では人間の品位も何もあつたものではないぢやないませんか、處が日本の實業社會ではこゝろいふのが多い、金さへ儲ければ、嘘を吐いても

人を欺しても構はないといふ風が往々見ゆるのは誠に慨かたしい次第で、然るに英國商人の遣り方は我日本の武士道で、一度イエスといつて約束した事は金銭上の事でも、期日上の事でも必ず其通り履行する、又先方は必ず紳士の體面に懸けて約束を履行するに相道ないと信じて案心して居るといふ有様で、日本などは、雲泥の差では、いませんか。

○自己の分限以下に居れ

人に使はれて居るのに、自分の取るべき給料が自分の力量より不相應に高いのが一番出世の妨となるもので、先づ百圓の給料を取るのが自分相當の分限ならば、其以下の八十圓とか七十圓とかいふ給料に、我身を置くのが出世する本で

ムいます、之に反して百圓位の働きしかないものが、僥倖にも百二十圓も百五十圓も取て居つたら、其人は生涯出世は出来ぬ、是れは餘程青年諸君が考へねばならぬとでムいます、世の中には何か便宜の傳手を求めて、可成多くの給料を取るのを手柄のやうに思つて居るものが往々あるが、其れは甚だ間違て居ります、若し其れに依て得たとすれば、それは一時の僥倖といふもので根據ある立身出世といふものではない、却て身の發展を好げるのでムいます、其譯如何とひますと、先づ私が會社で人を使ふにしても、あの人間は大分やり人である、あの人間は安買して居るあれだけ給料をやつて仕事をさして居るが、働も善し力もある、さうして給料は安いがそれを氣にせぬ、給料が安いからといつて其れが不平だといふ顔もせず、自分の職分を勉強して居るといふことになる、私は如何にも其人が可愛くなる、

感心な人だと思ふ、何時か時機があれば此人は相當に引上げて行かなければならぬといふ感を持つやうになるではムいませんか。

(萃抜)

僥倖

職分

職務

分限

○安心と極端社會主義

一業勤績の精神確實なるは、要するに各自分に安んずる心が働かないからでムいませんか、ちやんと身の分を知るからして、空想に走ることもなく他の榮華出世を羨望して煩悶する等のこともない坦然として自ら操るべき道を守つてゆくのでムいます、休暇日などは富貴の人は相携つて公園や散歩し、美麗な服装、鮮かな馬車、誠

に人生の榮華を極めて他所の見る目も浦山しそうに見へますから、若し他國でありましたなら、貧民等、羨望の結果嫉妬の情を發し、悪口を放たないとも限りません。然るに倫敦には貧民もなかく多いけれども、特に富者の身分を羨む風も見えず、平然として我分に安んじて居るやうに思はれます。概して、英國には社會主義者等の過激の運動が、歐洲大陸程成功しないが、其原因の一は儘に空想を排し極端を厭ひ、各自分を守る所の、常識の指導に依るものと信せられます。

(萃拔)

羨望 嫉妬 空想 妄想 極端

○良心の満足

何人でも良心を欺く事は出来ないもので、常に此良心の満足を期して行く事が、人格修養の實際的工夫で、身に一錢の借財もなく、顧みて良心に耻づかしい事がなく、大手を揮て大道を濶歩する位、男子の愉快なことはない、其人格の公明正大なる人には必ず此報酬があるもので、人の心事といふものは、玻璃壘に清冽の水を盛つた如く、透明純潔、少しも濁りが無いやうにせねばならぬので、他人から見れば何となく行動が曖昧で、自分も常に之を辨解して行くやうでは紳士と云はれないので、これは既に精神的に失敗して居るのであるから、纏て物質上の失敗を招くことは當然の事であり、露國にトルストイといふ文豪がある、此人は極端な論者で、一々其所説に感服は出来ませぬが、唯一つ氣に入つた事を言つて居ります、即ち「人間處世の目的は良心の満足を得るに在る、人は額の汗

で生活すべきもので、一錢一厘でも自己の勞働に對する報酬より外に收入といふべきものはない筈だ、不義の富を積んで居る富豪貴族よりも、貧寒ながら正直の勞働者の方が快い譯である、と喝破したのは大に吾意を得て居るのみではありません、此心事を以て實業家となり政治家となり學者となる者が公明正大の人たるを得るものであります、良心を満足させる事の出来ないものに、富嶽の雲表に聳ゆるやうな高潔な人格は決して見られないといつても差支へはありませぬ。

(萃拔)

清冽 しみよろ

透明 すうめい

純潔 じゆんけつ

辨解 べんかい

○店員使用の心得

店員は表面から言へば一個の使用人でありませんが、唯だ之を使用する丈が主人の能でありませぬ、半分は彼等を育てるといふ心意氣が無ければなりません、殊に若い店員若くは給仕の如きは、長い將來を持つて居りますから、主人たるものは能く注意して前途を誤らないやうに、指導せなければなりません。固より同じ梅の木でも、苗の時から大小に自ら凡ての定りもありません、之を育てる方法を誤まらぬ時は一本と雖も棄てるものはありません、大なるものは庭に植へて園景を飾るとになると共に、小なるものは盆栽になりともして其風趣を楽しみます、そこで店員各自に過のないやうに心掛且つ年少の者には、幾んど強制的に夜學に通はしめ、給仕の内湖給の者は行費を給して、通學させるなどは最も良法であります、抑も世間多數の中には、高等の教育を受けてゐても、品性の陋劣なものもない

ではありませんか、而も一體に智識の程度の低いものが、兎角墮落し易いのであるから、此く給仕の末に至るまで學問を奨励するといふことは最も肝腎だらうと存じます。

(萃拔)

陋劣

指導

○耕作改良に就て

農作の改良談は一朝一夕の事で云りませぬ故之をば専門家の演述に譲りまして私は只た耕作の改良すべき必要あることを一言致しまじよふ。改良と謂ふことは如何なる種類の事柄にも至極結構なる事で云りますが農業上に於きましては耕作其他の事

に改良を加へなければならぬ事が澤山在らうと思はれます抑も耕作の改良は、第一植附くる所の穀物の豊穰なると否とに大關係あるのみならず第二地味をして良好ならしむると荒蕪ならしむるとの差異あるのであります第三は肥料を多く要するると否との別がありまして第四勞力を加ふることを減少せしむるの方法もあります斯くの如く種々の利益あるので云りますからして耕作の改良は實に必要の事と信じます。

(拔萃)

○大資本と小資本

商人なるものは資本を以て其精神となすものなれども小資本なればとて決して心配するには足らないので寧ろ其運轉の悪しきをこそ心配しなければなりませぬ一休小

資本なれば其運轉上大事業を爲すに足らないからして商人たる者小資本を嘆ずるの
であります。が縦令大事業を爲すに足らない處が其資本相當の事は勿論爲し得るもの
なれば幾度か其小資本を運轉爲しつゝある間には漸く積んで大資本となるを得ます
るからして只だ其小資本を延ばす事をのみ考へれば最初は實に小資本で其れから段々
商となられましたる人の傳紀を讀んで見ますれば最初は實に小資本で其れから段々
になり上がるのであります。現に京阪神にて屈指の紳商は其七八分は小資本より成り
し者が多いのであります。してみると小資本だとして決して憂ふるに足らないと思ひ
ます。

(萃拔)

運轉 屈指

○牧畜を奨励す

牧畜の業は英雄豪傑が世事を煩しとしまして隠遁したる如き心地せられて誠に壯
快でふります。殊に今日は牛乳、牛肉ともに滋養品として世上に缺くべからざるも
のであります。からして需要は極めて廣いのであります。私は牛馬の外に羊、豚等を
も數千頭牧畜致し居ります。が近來は何れも價額高くに賣れ行きます。爲め頗る收入
にはなりません。昔より農家に於て牛馬等を飼養せぬ家は殆んどありません。なれども牧
畜業として専門に數多の家畜を飼養する者は誠に少いので近來追々と農家にして牧
畜を爲す者の數を増しました。牧畜は實に一個人の利益なるのみならず間接に社會
の有益なる事業でふります。から牧畜の業を創められんことを切に奨励せんと思ふの

であります。

(萃拔)

世事

隱遁

壯快——獎愉快

○法律上より見たる主従關係

勞役者の雇主は如何なる權利義務あるかと申しまするに雇主は雇人なる勞役者に對しまして其約束したる賃銀を拂渡さるべからざるの義務あるものでありますけれども勞役者の仕事を爲さるとき又は仕事をして未だ一定の仕事了へざるるときは之を拂渡さなければならぬ義務はないのであります、されば前借を爲すときは又は半日にて其殘る半日の仕事を了へざる間は其一日分の前拂をしなければならぬ義務もあ

りませぬ故、勞役者の申入を拒絶することをも得るのであります、右述べ所は雇主の義務でありますが雇主の權利なるものは其賃銀を拂渡す代りに其約束したる勞働に使役するを得るの權利であります凡そ人は身体の自由權を有するものでありますからして謂れなく、其自由の束縛を受くるものではありませぬが、雇人たる勞役者は、雇主との契約上一身の自由を殺いで雇主に服従したるものでありますからして、雇主の指圖する通りに其勞働に服さなければなりません、故に縱令其勞役中に無據事故が生じ又は父母兄弟親戚の死ぬる事又は遠方に旅行する等の事あるを其勞働を置いて自由に其父母兄弟親戚の死を吊ひ又は旅行するものを見送くることは出来ませぬ、尤も雇主の承諾あるときは此限りではありませぬ要するに雇主は自己の權利として一定の時間勞役者の自由を束縛するを得るものであります。

(萃拔)

束縛 契約

○手形と商取引

手形と文明國の商業界にては盛んに行はるゝやうでありますが我國は或る僅々の商人間に限り行はるゝの姿にて一般商人間に行はるゝには至らないのは誠に残念で且つ我國の商業の發達しない證據ではありませぬか元來手形と申しますものは其爲替手形たる約束手形たるに論なく又小切手にても現金同様の姿にて信用あるものゝ間に轉帳流通するのでありますからして先づ通貨を排渡すの煩なく且つ危険も少ない殊に遠方に於けるの取引は手形取引を以て最も便利なりとします、斯かる次第

(萃拔)

轉帳 恐慌

流通 通用

危険 險昏

○政黨とその價值

第でありますれば、手形取引の利益ある事は誠に明瞭なることでありうかと信じます、我商人たる者盛んに手形の取引を開始することを望みます、人動すれば手形の取引を盛にすれば經濟上の恐慌を來たすことあるなどと説くものありませぬ、決して左様な次第ではありませぬ、何せと申せば縦令手形がなくとも恐慌の起ることもあるは必然で手形の有無が少しも經濟上の恐慌に關係を持たないのであります。

私は政黨の存在する國に於きまして完美なる政治の成績を擧ぐるを得るかと思ふ

事即ち政黨の利弊を論せんと思ひます、政黨なるものは同一の主義政見を有する人が相團結したるものでありますけれども、人は各人所見を異にするもので時としては、甲の認めて正理と爲す事も、乙は不正理と認むる等の事なきにあらず之れが人類の情態でありますからして、主義政見の同一なる爲め一度相團結した事も議會に立て事を議するに當りては時として自己正理と認むることも、其政黨の主義綱領の許さるゝ爲め、枉げて不正理と認め盲従的の所作を爲さざるべからざることもあります。此等の點よりすれば政黨なるものは正義の輿論と謂ふべからざるは勿論實際に所見を同くするもの、團結と云ふ能はざるの次第であります、さすれば政黨は弊あり利なきもの、如くに思はれますが、個々獨立の各政事家が無數の政事的意見を有し國家の上之を行はんと欲するに至つては到底行ひ得べきの事にあらざ

るのみならず、或る一定の主義政見の下に之を團結して、其所思を行はしむることを期するを肝要とするのであります、之れ即ち政黨なるもの、起り、政黨なるもの、利ある所以であります、殊に況んや立憲政体の國に於ては、政黨の政府の爲政を監督し其不正なる點あれば、之を議會に彈劾するの勞を厭はざるを以て、政黨は有益なるものとなるのであります、我國の政黨は主義綱領なるものあれども、其主義綱領の確的ならずして感情的なるは誠に残念なる次第であります、何れ追々政黨も進歩しまして眞實なる信念の下に、國家を擁護する時機があると存じます。

(萃 拔)

完美——完全美麗。 利弊——利益弊害。 團結——
 政見——政治見解。 綱領——のびたて
 輿論——のたまふ。 爲政——まづりごと。 所思——おもふ
 盲従——したまひに。 所作——しごと
 彈劾——はらつ。 確的——しつかり

兼護

○人格と公園

公明正大の人格とは即ち明るい人格を意味することでありまして、心の中に少しも疵しがない、又薄暗いところの無いやうにするのが一番大切だらうと存じます。この修養足らざれば誰とて信用して呉れやう筈がふいません、この明るい人格につけてこそ公園が最も適例だらうと思ひます、すなはち理想的公園といへば取りも直さず明るくなければいけないものであつて、薄暗いなどは以ての外だらうと思ひます、かく申しますれば極端に聞かぬて或いは一部の反對を招くかは知りませんが、東京とか大阪とかの真ん中に敢て深山幽谷の趣を見せずとも、要はカラリとした

見透しの付くのが何よりだらうと存じます、この點から云へば、大阪にはこれぞと別に取り立て、言ふほどの公園もなければ、東京に於ける上野公園の如きは實は感心せぬのでふいませぬ、といふものは餘りに樹木生ひ茂り、晝尚暗さが如き深山の趣があるから、時々藪の蔭にブランコ往生者がブラ下るとか、又は種々の罪惡が潜むなど、實に厭やな感念を起さすものでふいませぬ、抑々公園などといふものは、譬へ夜間なりとて婦女に至るまで安心して通行の出来るやうでなくては公園としての値打もなさうに思ひます、この點からいへば日比谷公園は比較的理想到に近いと云はなければなりません、人格として亦この通りでふいませぬ、心に薄暗いところがある人は、その心頭時々罪惡その他の誘惑物がブラ下がつて、或る一時は虚榮に誇ることありとするも、その靈魂は既に長へに亡んで居つて、假令巨萬の富を積んだ

とてチットモ餘裕があるものでは無いとせん。

(萃拔)

適例

靈魂

餘裕

○古來に於ける武士道

「此借用若し期日に至り返濟出來ざる時は、衆人の前にて御笑ひ被下度候」とは實に、昔の武士が取り交はいた證文の文句で云います。何うです武士道の精華はこの短ひ一句の中に活躍して居るでは云いませぬか、抑々武士道と申しますものは仲々廣い言葉でありますが、一面から見ますれば、ツマリ全力を擧げて體面を維持する道といつても差支へは云いませぬ、今の世では衆人の前で笑はるゝとも一向平氣

なもので云いますが、昔の武士は實に殺さるゝよりもつらかつたので云います、といひますのは、彼等武士が體面を重んじた結果、笑はるゝといふのはその體面に非常なる傷害を與へたからであつて、そこだからこそ彼等武士は死ぬるよりもつらひ笑に換へてまでも約束を守り、然諾を重んじ、責任を盡し以て體面を保たんとしたのであります、これがすなはち武士道とも謂ひつべきもので云ります、由來耻を知り、義に勇み、責任を重んじ、然諾を重んじ、不正不義を行はぬのは何れの時代でも偉大な人格、偉大な國民性の特徴で云りまして、私が申す武士道もツツマリこれに過ぎないので云いますが、翻つて現今の實業界を見渡すと何うで云いませうか、或る點に於てはこの武士道が最も肝腎のやうに思はれます、何故かと申すと實業たるもの、精神は人類相愛の主旨を基くべきもので云りまして、決して自己を富

まずといふを以て第一の目的としたものではないと存じます。だから、健全なる實業は耻を知り、義に勇むといふ大精神があつて、尙ほ且つ責任を重んじ、然諾を重んじ、躰面を重んずるの實業でなくてはなりません。茲に於てかッマリは武士道

(萃拔)

衆人	精華	活躍	傷害
然諾	特徴	相愛	互愛

〇活動と孝行

從來世間で親孝行と云ふうちには、親の意思に背かぬと云ふ消極的方面と親の思ふ所は進んで行ると云ふ積極的方面と其の何れをも含んで居るので、要するに、何

は兎もあれ、親を満足せしめると云ふのか孝行の本趣になつて居る。考ふべき所はこゝだ、凡ての場合、親と子の意思が常に同一軌に出で、子の爲さんを欲する所は親常に賛成し、親の思ふ所は子之を行ふ様な都合に行つたら何の文句もないが、親と子とは年齢も違へば、智識の新舊の程度も違ふ、従て、意思の衝突を免れない。恚うなると、直ぐ親孝行、子は親に屈伏することになる、是が今日の倫理である、あゝ、斯の如くにして其の結果は如何、活潑々地たる青年の元氣を阻喪せしめて彼の光明ある進路を妨げ、大人物たるべき青年を化して碌々たる斗屑の輩となし終るではないか、例へば、探險好きの青年が探險に出掛けやうとするのに親は危険だから止せと云ふ、親の意に従へば、子は孝行の子とはなるが、這んな孝行は何になる探險家たるべき子の進路を妨げ、探險によつて得べき社會の利益を滅殺するのみで

はないか、斯の如き場合には、親は、子と社會とを害するの罪を負ひ、子は、社會に貢獻せぬと云ふ罪を負はねばならぬ、親孝行の社會を毒することも亦驚くべきではないか。

(萃拔)

本趣

同一徹

屈伏

阻喪

斗屑

滅殺

○立身は男らしくせよ

如何にして立身出世す可きかは、非常なる難問題であるが、又同時に、頗る容易なる問題である、世人は、社會を大層六ヶ敷く見て居るが、行り方に依りては決して左程六ヶ敷いものでない、従て、立身出世するのも、左程困難なる事柄ではない

卒直に云へば、立身出世は、只全精力を傾倒して、一生懸命に働くより外、更らに道がない、固より一生懸命に働かずとも、才を以て立身出世する者もある、例へば上役の機嫌を攪るとか、權謀術數を以て、人心を籠絡するとか、所謂才人的成功をする者がある、滔々たる日本現代の成功者は、多く此の種の人である、其れ故、權謀術數をめぐらす事も亦、立身出世の一要素なるが如く見ゆるが、自分とて、強ひて上役に反抗し、人心に背馳せよとは云はぬ、けれども、權謀術數を弄して迄、立身出世をしやうと云ふのは、甚だ卑劣な、女々しい事である、斯の如きは、斷じて男子の取るべき道でない、且つ、成功者自身に取つても、彼は、重役に阿諛して現今の地位を得た、彼は、斯の如く人を陥れて富を造つたなど、云はるゝのは、不愉快至極の事ではないか、一生懸命に働いて、報酬として立身出世したら、其の愉快

さも亦一しはであると思ふ、ふれば、立身出世するには、何處迄も正々堂々と、一生懸命働くに限るのである。

(萃拔)

傾倒 籠絡 權謀術數 反坑
要素 背馳 阿諛

○先輩は後輩に接觸すべし

兎角當節の先輩は自己を高く標榜して青年と接觸する事を厭ふの風が見へる、是れは世の先輩として責任を全ふしたものでないのみならず、自身にとりても利益の事ではない、余は先輩と後進との距離をオツと近くし、而して立憲政體的に銘々の思想を話し合ふ習慣をつけたいと思つて居る。後進に論伏でもされると大變の恥辱の

様に心得て居る先輩があるやうだが、是れは寔に心の狭い話である、若し議論して負けたなら、貴様は感心の奴だ、俺より良い議論を持つて居ると云ふ度量がなければならぬ、斯く申す予自身は勿論、目下校長の眞似をしつゝあれども、好で青年の説を聴き、度量を大きく仕様と心掛けて居る、今日は自由言論の世の中である、國家の威嚴を傷けず、社會の秩序を紊さず、行政施行に差支を及ぼさざる限りは、勝手に放題の熱を吹いて宜しい、而して各自熾に思想を交換するが宜い、當節の先輩は兎角自己の意見のみを主張し、人の説を容れることを嫌ふ、また青年に會ふ事を嫌ふ、なせ嫌ふかと云ふと、今の先輩は錦襪を着て居る、ヒカ／＼光らして居るが、其は遠目で見られた時の事で、傍へ寄つて見ると、皆ごまかしもの、錦を着て居るのだ、だから後輩を傍へ近附けると、直様其れが露見する、箔が剝ける、瘻く見せかけて居

るものゝ、其の實定見もなければ、主義もないのだ、だから青年から質問を發せられても之に答へる事が出来ない、其故に會ふのを成可く避けて、いつまでも其ゴマカシ餅を着て遠目でおどかして居る、宛然背景のやうなものである。實に憐けない根性を有つて居るが、ナニ馬は乗るもの、牛は車を牽かせるものと心得て居ればよい、幾ら驅けても人は馬に及ばない、馬に及ばずとも馬の足を利用すればよい、他人の説に及ばずとも、他人の説を利用すればよい、先輩は此邊の道理を解し、好んで他人に接觸し立憲政體的に思想を交換せば先輩と後進との聯絡も容易に付くたうと思ふ、取捨は各自の勝手である、之を利用せば夫れ丈け其人は利益するのである、而して社會教育は是より生れ、是等を名けて社會教育と云ふのだ、從て青年の元氣も大に養成せられるのである。

(萃拔)

標榜

接觸

距離

○社會の教育

社會教育は普通の意味に従ふと、社會の風潮に鑑み又は制せられて、自からを戒むるにありと云ふ様だが、果して左様にして、教育を受くる事が出来るかどうか、是れは頗る疑問である、抑々社會と云ふことが甚だ漠然として居るスペンサーは社會の目は何だとか社會の鼻は何だとかと言つて居るが、要するに譬話の様なものである、スペンサーが説いたのだから學説と言つて居るけれども、其實眞面目なるお伽噺を遣つて居る様に見える、社會は有機體であると云ふ説も成程さうかと思は

れるけれども、果して有機體であるかどうか、たゞへ有機體であるとしても人間が知つて居る有機體とは餘程性質が違つて居ると思ふ、要するに社會は有機體と云つても甚だ漠然とした體である、社會の意思、社會の風潮と云ふも果して何處に顯はれて居るのか解らぬ、社會は多人數の集合體と言ふが、お祭の時に多くの人が様々の様子をすする、之を社會の狀態としてよいか、それからよく人が社會の輿論と言ふが、社會の輿論とは一體どんな者か、輿論は多人數の意見であると言ふ定義より言はゞ人出の多き夜見世に演説して其に賛成すれば、之を以て直に社會の輿論と言てよいか恐らく然らずと言ふであらう、大久保に出齒龜が人を殺したことを新聞の三面に大きな活字で書いてある、之を社會の風潮と解してよいか、否々、夫れは唯社會の一部である、決して社會全體の狀態、社會を押しなべた風潮ではない、それで

眞に社會全體の狀態、社會を押しなべた風潮を知るは、極く感じ易い、鏡の如く滑に輝く精神を有つた人でなければならぬ、即ち斯様な精神を有つた人でなければ、社會の狀態社會の遷に鑑みて已を教育する事が出来ないのだ、所で斯様の精神は生れながらにして有つて居るものでない、斯様の精神を有つに至るには宗教、學校教育、家庭教育、讀書乃至世の先輩に就て個人々々の心を磨かねばならぬ、即ち社會教育を詮じつめれば個人教育と云ふことに歸着するのである、そこで又社會教育は個人教育の裏であるといはれると思ふ、社會が自分を墮落せしめたと云ふ、其裏を云へば自分が自分を墮落させたのである、社會は彼を驅つて偉いものにしたと云ふ、其裏を見れば、彼が偉らかつたのである、言葉は違ふけれども、物其物は同一であるのだ。

(萃振)

漠然

状態

變遷

○先づ境遇を開拓せよ

近來教育ある人々にして就職難を嘆ずるのを屢聴くが、斯くの如きものは如何なる心得を以て進んだがよいか、是れには第一教育の目的から變へてかゝらなければならぬ、今日の教育は官廳なり、銀行なり、其の他會社なりに於て働く人を養成するが主眼である、創業の際はそれで教育の目的は達せられたが、今日は其歴史では駄目だ、又青年も其歴史を以て學問するのは大なる心得違ひと云はなければならぬ、學問は獨立自營の能力を養ひ、自分の天分を全うするに必要なる人格を養成する

にある、又生活を完全にし、活動を豊富にし全うするを目的とせなければならぬ、若し青年にして此の覺悟を以て進んだならば、今後幾ら人が増加しやうが、幾ら職業が無からうが、決して生活に困難すると云ふ事はない、さすれば今後益々職業は増加するであらう、斯く學問をするのは獨立して事を爲す能力を養ふが爲めだから職業は獨官廳や會社ばかりではない、萬般に亘つて自分の運命を自分で開發して行くので、教育が進めば職業は次第に殖へる譯である、それ故國家に於ても個人に於ても、教育ある人が増加して困ると云ふ事はなからう、今日青年が困ると云ふのは畢竟當事者が教育の根本や誤り、學生の方でも甚だしき心得違ひをしてゐるからだ、それ故今後は教育の根本の目的を改め、獨立の人間を作る事に注意せなければならぬ、又學生も其の覺悟を以て進まなければならぬ、斯くして初めて新事業や大發明

を企てるものが出来、其の他凡ての事が圓滑に進行し、従つて社會全般の生活を高め、て行く事が出来る、要するに學問は裝飾的の學位を得るが爲めに遣るではない人格を練るが爲め、實際に働かざる人を作るが爲めであるから、學生たるものは自分の境遇を開拓して、獨立自營の道を講せなければならぬ、徒らに外聞に依頼し、人に依頼する間は決して眞の成功を見る事は出来ないであらう。

(萃拔)

主眼 創業 豊富 根本 圓滑
 裝飾的 境遇 開拓

○ 平和時代の戦士

余輩は學校教場を指して、既に教師と生徒との戦闘場裡と認むるものであるが、青

年は常に戦士の覺悟が必要である、随つて仕事は皆生命懸けてやらねばならぬ、近來は一般に輕佻浮薄の潮流があつて、柔弱になつて居る、之は都市遊學の爲め、都會風に化された所もあるが、又一つは先輩等が節を變じて、金儲けに日も維れ足らぬ狂態と示して居るのも一原因であらう、併し先輩は先輩で善き所は學んでも惡しき所は看過して、自ら處理する考を持たねばならぬ、而して今日の平和時代に於ては不屈不挫、飽迄も一個獨立の平和的戦士として奮闘する外はない、色々の論とか説とかに頓着せず、雜念を一掃し去りて本分の爲めに戦へ、是れ懸かて國家を強大にする基となるのである、平和時代の戦士としての青年は、何時も若々しく少年時の氣象を失なはないで、元氣旺盛であらねばならぬ、又淡泊で正直で無邪氣な所があつて欲しい、若か隱居風の引込思案は現代青年には大禁物である、既に戦士

である、何物を以て戦ふにせよ、是非曲直を明かにし、確信する所ある以上は、躊躇する所なく進むの勇氣を要する。戦争に出た時に彈丸が飛んで來るのが恐はいとて愚圖くして居たならば、必ず敵に乗せらるゝとは解り切つた話である、進まずんば屹度退かねばならぬ、逃げれば追はれるに極つて居る、青年が世に立つ時は、背水の陣で進むあるを知りて、退くあるを知らぬ位の覺悟でなければ後れを取る、最も戒心を要するものである。

(萃拔)

戦 闘 場 裡

狂 態

看 過

不 屈 不

挫

雜 念

淡 泊

背 水 の 陣

○不規律的惡習を打破せよ

拙者の存する所では、先づ今日の青年が今少しく規律的に爲つて貰ひたいと思ふ、何故かと云ふに、今日の青年には、會社や銀行等で事務を執つて居る所を觀ても、殆ど事務を執つて居るのだから、遊んで居るのだから判らぬやうなのが随分ある、先づ朝事務所に出勤して來ても、一寸茶の一杯位も飲んで、話の一時間位もやり、それから新聞の二三種も讀んで後事務に掛ると云ふ者が少くない、事務に掛つて後もセッセと云つて勉強すれば善いが、それは餘りに勉強をせず、先づパチ／＼と算盤を弾いては一プク煙草を喫み、コチ／＼とペン尖を走らして置いては又一プク、其中に十二時に爲る、すると、總別戦争の掛引は腹が減つてはならぬものと、云ふので早速辨當を食ひに掛る、辨當を食ふ時に雜談をする位は必ずしも悪しくないが、食つた後には、少しく休息しないと衛生の爲めに悪むいとか言つて、先づ雜談を始

める、其話の中には種々世間の噂話、各自の妻君の批評、それから、前夜食つた牛肉の甘かつた事、出勤の途中で遇つた婦人の美貌であつた事、それが自分の方を向いて笑つた事、イヤ下らない事ばかり話して到頭一時間、其後ソロソロ事務に掛るが、其事務を執る工合は秦の始皇帝の阿房宮の建築式で、五歩に一樓十歩に一廊ではなく五分に一蒲、十分一杯と云ふ風で、煙草を喫んだり、茶を喫んだりばかりして居て、殆ど事務を執る時間と云ふはない、其中に御定まりの喫茶時間が来る、すると、事務を執る時には、何時も成るべく遅く往くが、茶菓子でも運ばれる時と爲ると、眞ッ先に飛出して、先登の功名を誇る、其時間が何の位と云ふと、之も一時間ばかり、それから又も机にかゝるが、此時には早や歸宅の時間が近づいて来て居るので、最早時間が来さうなものと、袖から時計を出しては眺め、袖から

時計を出しては、眺めして居る、西洋人が日本を視察してから國に歸り、事務を執る時に於ける日本青年を観るに、彼等は遊んで居るのか働いて居るのか判らぬと評した事があるとの事は兼ねて聞及んで居たが、實に或る會社や、或る御役所などへ往くと、此様にして時間を空過して居る者が少くない、悉く然りとは到底言へないのであるが、少くとも、此の如き會社や御役所は慥にある、苟くも新日本の青年たる者が従事して居る會社や銀行があつたならば、是等の點は改正して、何うか事務的に、規律的に、大に活動して貰ひたいと思ふのである。

(萃拔)

總別々 視察 空過

○ 神經過敏の社會

現代青年は餘程神經過敏であるが、是れは獨青年のみならず、社會一般に亘れる弊害である。是れを以て青年のみの病とする事は出来ないが世の中に出たものは、草で云へば蔓草のやうなもので、兎に角搦む處には搦み、根を張る處には張つて、多少の風に冒されても大した害はない、延びやうとすれば延びる事も出来る、然るに青年は二葉の發生したばかりの處であるから悪い風潮に當れば葉を痛める事が激しい、然らば如何にせば其の過中に巻き込まれないかと云ふ問題は教育者などが盛に其の聲を大にして、色々方策を講じてゐるやうであるが、一向要領を得ないやうである、私の考を以てすれば、教育家諸公よりも新らしく生れて來た青年の頭の方がよい、失禮ながら微だらけの頭を有する教育家諸君は、何を以て青年に臨むかと云ふと、精神的に感化して行く事が出来ないから、己むなく規則を以て是れを繋ぐとして居る、然し是れは徒らに青年の反感を買ふだけで、何等の効力もあるものではない、延びんとするものを抑へやうとすれば、其のものは勢ひ横に向ふのであるから、教育者が其の方法を取つたならば、却つて青年の延びる力を脇の方に延ばすやうになる、従つて青年は所謂厭世的にも走らう又所謂デカマンの方にも向ふであらう、兎に角全く見當違ひの方法を以て、青年を抑へやうとするから可けないのである、是れは青年に對する希望ではない、教育者に對する希望であるが、青年を教育するには今少し眞面目の方法があらうと思ふ、徒らに小説を讀むな、詩や歌を作つてはならぬと云ふても、決して其れを防ぎ止める事は出来ない、青年の目を閉ぢ

がよい、失禮ながら微だらけの頭を有する教育家諸君は、何を以て青年に臨むかと云ふと、精神的に感化して行く事が出来ないから、己むなく規則を以て是れを繋ぐとして居る、然し是れは徒らに青年の反感を買ふだけで、何等の効力もあるものではない、延びんとするものを抑へやうとすれば、其のものは勢ひ横に向ふのであるから、教育者が其の方法を取つたならば、却つて青年の延びる力を脇の方に延ばすやうになる、従つて青年は所謂厭世的にも走らう又所謂デカマンの方にも向ふであらう、兎に角全く見當違ひの方法を以て、青年を抑へやうとするから可けないのである、是れは青年に對する希望ではない、教育者に對する希望であるが、青年を教育するには今少し眞面目の方法があらうと思ふ、徒らに小説を讀むな、詩や歌を作つてはならぬと云ふても、決して其れを防ぎ止める事は出来ない、青年の目を閉ぢ

口を塞ぎ、耳を塞ぐよりも、寧ろ食いたいものは食べさせ聴きたいものは聴かせ、見たいものは充分見せた方がよい。人間と云ふものは其塵詰らないものでもないけれど、又其塵危険なものでもない。私が教育家諸君に望む事は、今少し清濁合せ香ひやうな青年を造れと云ふ事である。

(萃拔)

反感 いんげん

危険 けんけん

清濁 せいじやく

過敏 かびん

發生 せいじやう

渦中 うずちゆう

方策 ほうさく 方法 ほうほう 策畧 さくりやく

○青年に根氣なし

斯く云へば學校を甚だ輕しめるやうだが、決してさうではない、學校は食はして呉れる處でないばかりでなく、頭を拵へる處でもない、凡ての智識は必要があれば清

も濁も構はず腹の中に入れて消化して見ると云ふ度胸で遣つて貰いたい、兎に角生活難と云ふ事は如何なる事があつても、又如何に取去らうとしても、己に離る可からざる事であるから、其塵事は少しも念頭に置かずして、天は無祿を生ず、と論語にある如く、又「明日の事を思ひ病ふ勿れ」と聖書にある如く考へてゐなければならん。要するに膽玉を太く持たなければなるまいかと思ふ。是は甚だ卑近の例を引くやうだが、古の奉公人は十年或は十五年の年期を入れ、文學や美術の志望者も師の門に至つて親しく薪水の勞を取つて、殆ど年期的に遣つたものである、是れは勿論今日の社會に適應は出来なからうが、根氣の問題から云へば甚だよい事で、試みる方、爲めには大變よい方法である、今日の青年は是れを形に於て學ばんもよいが精神の上に其の覺悟を以て貰ひたい、二年三年の修業で名かなせないからと云つて

其れで失望するやうでは根氣のない骨頂だと思ふ、何うか根氣を長く持つて貰いた
い、是れが青年諸君に對する第一の希望である。

(萃拔)

念頭あたま 卑近ひじんの例たとへ 薪水しんすいの勞はたらき
年期ねんき的てき 適應おこころ 骨頂ぼんてい

○道德の根底破壊す

近來社會の道德は根底は破壊され、人々は物質的文明の中毒に昏醉せる状態である
が、其の源因は彼等青年にあらずして、寧ろ奮闘場裏にある老人が作ったのだと思
ふ、青年の精神を支配する處のものは、主義とか理想とか云ふものであつて物質的
慾望よりも精神的慾望が更に盛であるそれ故今後道德の腐敗を一掃し、思想昏亂の

統一を計るには是非ども是等青年の手に俟たなければならぬ、且つ青年には此の大
事業を爲すに渴望があり、元氣がある、元來腐敗とか、不完全とか、或は闇黒とか
と云ふ事に就て眞に深く洞察し得るものは青年より外にはない、家庭や學校や社會
に於ける弊害を見破つて、其れを改善せんとするものは青年である、自分等が師範
學校にゐた時代にも、漢學の弊害を感じて國家の教育を改良せんとか、或は是れで
は國家の存立が危いとか頻りに考へたものだ、決して社會の腐敗を其の儘放任する
と云ふ事はなく、其の腐敗を根本的に改革せんと云ふ反抗心が起つた、それが自分
の獨立心となり自奮心となつて立つたのだから、社會の汚い風習に染らうとしても
染らない、獨立自營の精神が起れば自奮心が起つて來る、又自奮心があれば其れは
哲學を求め宗教を求め、其の時代に依つて宗教に行き、哲學に行き、